

56

Award
Recipients'
Activities

第56回「博報賞」 受賞者活動紹介

主催：公益財団法人 博報堂教育財団
後援：文部科学省

「博報賞」は、児童教育現場の活性化と支援を目的として、
財団設立とともにつくられました。

「ことばの力を育むことで、子どもたちの成長に寄与したい」
そんな思いを核に、日々教育現場で尽力されている学校・団体・教育実践者の
「波及効果が期待できる草の根的な活動と貢献」を顕彰しています。
また、その成果の共有、地道な活動の継続と拡大の支援も行っています。

活動領域

「国語・日本語・ことばの育成に関わる教育実践」と、「特別な配慮や多様なニーズのある子どものコミュニケーション活動を支援する教育実践」を起点として、時代とともに変化する教育環境を受けて、対象領域も広がっています。

国語教育

- 広く「ことばの力」の育成につながる活動
- 言語文化に関する興味関心を育成する活動

日本文化・ふるさと共創教育

- 文化や伝統、地域などに関して学ぶなかでふるさとへの愛着や誇りを育み、自らの手でさらに発展させようとする人材の育成につながる教育的な活動

日本語教育

- 母語が日本語以外の子どもへの日本語指導
- 日本語教育、日本語指導につながる場の形成、教材や指導方法の開発

国際文化・多文化共生教育

- 多様な文化の相互理解を推進し、日本語で共に学び、共に暮らし、共に生きていくことにつなげる教育活動

特別支援教育

- 特別な配慮や支援が必要な子どもへの教育的支援活動

独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動

- 学校教育における取り組み
- 地域社会における取り組み
- 社会的・現代的課題に対応した教育的な活動

第56回「博報賞」には、全国都道府県教育委員会をはじめ、児童・生徒の教育に携わる多くの有識者の皆様から、多数のご推薦・ご応募を賜りました。応募活動の中身はどれも素晴らしく、昨年8月に開催した審査委員会では、過去の受賞活動とも比較しながら、活動の一つひとつ十分に時間をかけ、厳正に審査いたしました。

そのなかから別項にあります、子どもたちの主体性を引き出し「教育実践の活性化」を果たしている先駆性・独創性のある取り組みで、なおかつ「波及効果が期待できる草の根的な活動と貢献」として12件を博報賞に選出、うち3件を文部科学大臣賞に推挙させていただきました。さらに功労賞8件と奨励賞15件も選び、正式決定いたしました。

今回の応募件数は102件と、前回に比べ41件も増加しました。ここ数年の傾向として、コロナ禍を乗り越えた活動が目立つようになり、領域によっては長年の取り組みだけでなく新しい取り組みもあるバラエティー豊かな応募となりました。そんななか、子どもが大人と一緒にやり価値を見いだす実践や子どもが地域を元気にする地道な活動など、人とのつながりや協働性を大切にしたり取り組みが多く受賞しました。また、若い人のチャレンジも増え、今までになかった新しいアイデアの活動は今後の発展としても、大いに期待が持てます。

児童教育現場の活性化と支援を目的とする「博報賞」は、「ことばの力を育むことで、子どもたちの成長に寄与したい」という思いを大切にしています。2020年から感染拡大したコロナ禍によって、子どもたちのコミュニケーション能力の未熟さや社会性の育成の遅れ、さらには言語発達への影響など様々な課題が生じているといわれています。そんな子どもたちにとって、コロナ禍には経験できなかった、「人と人とが互いに目を合わせ、一緒に活動に取り組み、自分自身の存在を大切にしながら、相手を思いやり、笑顔でことばを交わす時間と経験を創り出す活動」が、何よりも大切であると感じております。日々教育現場でご尽力されている学校・団体・教育実践者の皆様と共に、子どもたちの笑顔のために、より一層の取り組みを進めたいと考えております。

最後になりますが、今回の受賞者の皆様にお祝いを申し上げるとともに、引き続き皆様からのご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

令和8年7月
審査委員長 滝川 国芳

審査委員

滝川 国芳(審査委員長/京都女子大学 教授) 安部 朋世(千葉大学 教授) 伊藤 亜希子(福岡大学 教授) 岩瀧 大樹(立教大学 教授)
郡司 明子(群馬大学 教授) 東風 安生(北陸大学 学長) 齋藤 博伸(文部科学省 教科調査官) 佐久間 亜紀(慶應義塾大学 教授)
山元 隆春(広島大学 名誉教授) 渡部 匡隆(大阪信愛学院大学 教授)

50音順(審査委員長除く)

博報賞・文部科学大臣賞

宮 城 県 **早坂 和枝**（大崎市立古川第五小学校 講師）
正しく発音できる喜びを実感し、
喜んで話す児童を育てることばの教室

静 岡 県 **磯部 真代**（浜松市立蒲小学校 教頭）
つながる学校
～社会に開かれた学びの実現へ～

宮 崎 県 **西都銀上学園**
西都市立銀上小学校・銀鏡中学校
銀上地域の自然・文化が紡ぐ教育の再生
～山村留学制度と共に歩んできた30年の取り組み～

博報賞

秋 田 県 **小林 陽介**
（北秋田市立義務教育学校阿仁学園 校長）
郷土資料集「きらり☆きたあきた」の作成・推進・
活用によるふるさと教育の充実

千 葉 県 **柏市立大津ヶ丘第一小学校**
創造力で地域を変える
～未来社会を担う子どもたちの挑戦～

神奈川県 **特定非営利活動法人 心魂プロジェクト**
難病児に届ける“心が動く体験”
～子どもたちの成長と命の輝きを引き出す～

新 潟 県 **岩船 尚貴**（柏崎市立南中学校 教頭）
ふるさとをことばで継ぐ子どもたち
～郷土作家を起点とした物語創作と文学交流～

長 野 県 **大鹿村立大鹿中学校**
生徒と地域で紡ぐ中学校歌舞伎公演会
～50年の軌跡と未来へつなぐバトン～

静 岡 県 **学校法人 ムンド・デ・アレグリア学校**
母語教育で「豊かな心」と「考える力」を、
日本語教育で「生きる力」を

兵 庫 県 **三木市国際交流協会**
多文化多言語の子どもとの居場所づくりを通して
共生を学ぶ

岡 山 県 **倉敷市立旭丘小学校**
豊かな読書生活の推進
～ことばの力をもとに豊かな人間形成を図る～

岡 山 県 **津山市立西小学校**
100年後も豊かな津山城西へ！
～学びの意義を高めるPBLの実践～

功労賞

青 森 県 **神田 昌彦**（弘前市立南中学校 校長）
環境再生活動の普及と定着を目指した
ESDの展開

埼 玉 県 **地球っ子グループ**
外国ルーツの子どもたちの
全人的成長を目指した地域での活動

千 葉 県 **きみつ少年少女合唱団**
被災地に「歌のちから」を届け続ける子どもたち

東 京 都 **特定非営利活動法人 しゅわえもん**
聞こえない大人（ろう者）が
ろう児に手話で自己表現する場を提供する

新 潟 県 **上越市立谷浜小学校**
地域連携による「ふるさとに愛着をもち、
地域と共に歩む子ども」の育成

山 口 県 **周南市立八代小学校**
八代の自然を守り継承する八代っ子の育成
～ナベヅルの保護活動を通して～

熊 本 県 **NPO法人**
外国から来た子ども支援ネットくまもと
外国ルーツの子どもたちの日本語教育、学習支援
進路保障および居場所づくり

宮 崎 県 **都農町立都農中学校**
地域文化の継承と子どもの成長をつなぐ学び
～都農神社夏大祭を中心に据えた実践～

奨励賞

群 馬 県 **豊岡 大画**（太田市立城東中学校 教頭）
4コマ漫画指導案を活用した、
授業改善につながる持続可能な研修の取り組み

千 葉 県 **南房総三龍亭**
キッズ落語プロジェクト

東 京 都 **特定非営利活動法人 メタノイア**
難民申請者の子どもと地域社会をつなぐ
日本語教室「Mutluわらび」

神奈川県 **湘南とアジアの若者による**
未来創造事業実行委員会
絵本で子どもたちの世界をひろげるプログラム

新 潟 県 **樋口 大輔**（新潟市立浜浦小学校 教諭）
子どもの笑顔があふれる教室
～〈漫才〉を音読する国語の実践を通して～

福 井 県 **あわら市金津中学校**
「あわら考幸学」の推進

静 岡 県 **裾野市東地区おやじの会**
毎月開催の「何にもしない合宿」をベースとした
日常の関係づくり

愛 知 県 **北名古屋市長師勝北小学校**
学校運営協議会
地域と共にある学校づくり
～互恵的な諸活動を通して～

京 都 府 **京都市立下京雅小学校**
幼小一体型の研究組織の構築 YMOプロジェクト
～Yobai - Miyabi - Organization～

京 都 府 **木津川市立泉川中学校**
つなぐ平和の学び ～友情は国境を越えて
姉妹校との半世紀ぶりの交流再開～

奈 良 県 **安里 健志**（大和高田市立浮孔西小学校 教諭）
通級指導担当教員が実施する
児童の障がい理解を深める教育活動

岡 山 県 **井原市立泉主小学校**
ふるさとの未来を願い、
児童の思いを実現する探究学習

岡 山 県 **和気町立佐伯小学校**
「ひと・こと・もの」とつながる
佐伯小夢プロジェクト

広 島 県 **広島県肢体不自由特別支援学校**
自立活動研究会
（福山特別支援学校、広島特別支援学校、
西条特別支援学校）
3校の協働で積み上げる肢体不自由のある
子どもの主体的な学びに向けた実践

宮 崎 県 **西都市立妻南小学校**
ふるさと西都を未来につなげよう
～SDGsプロジェクト in 妻南小～

※記載の所属・役職は2025年度受賞当時のものです。
※本文中の氏名については敬称を省略させていただきました。

博 報 賞 の 紹 介

博報賞

子どもたちの学習場面・生活場面において主体性を引き出し、「教育実践の活性化」を果たしている独創性・先駆性のある教育実践で、波及効果が期待できる草の根的な活動と貢献に贈られます。

※博報賞受賞者のなかで特に優れた活動には、文部科学大臣賞が授与されます。

功労賞

博報賞には及ばないものの、一定以上の功績がみられる、永年にわたる貢献に贈られます。

奨励賞

活動期間の短さなどから博報賞には及ばないものの、一定以上の成果がみられ、今後より一層の活躍を期待できる活動に贈られます。



手の動きと舌の上下運動を連動させた「り」の構音練習

宮城県 早坂 和枝（大崎市立古川第五小学校 講師）

正しく発音できる喜びを実感し、喜んで話す児童を育てることばの教室

（特別支援教育領域）

口の動きを示しながら正しい発音をサポート

音をつくる器官やその動きに問題があって発音がうまくできない構音障がい。相手にうまく伝わらない、聞き返される、まねをされて笑われるといったつらい経験をした子どもは、周囲とのコミュニケーションに支障が出たり、自信を無くしてしまったりしてしまう。

早坂和枝氏は、1993年にことばの教室が通級による指導に制度化された際、当時勤務していた小学校が拠点校としての役割を担うことになり、学校長から声がけされたことが指導の道を歩むきっかけとなった。当初は戸惑いもありながらも、新境地に挑む気概で取り組むことを決意し、5年間担当。

その後、異動を転機にしばらく間が空いてしまったが、大崎市立古川第五小に赴任したのをきっかけに再度ことばの教室の担当を希望し、現在まで8年以上続けている。

古川第五小では、1年生を対象に一斉言語検査を実施。2018年度と2025年の結果を比較すると、側音化構音障がいと置換性構音障がいの増加が確認されている。その要因として考えられるのが、食事における咀嚼（そくぱく）の減少。下顎を持ち上げ口を閉じるための咀嚼筋や、口角を持ち上げるための唇周囲筋の働きが緩慢となってしまう、子音が正しく発音できない子どもが増えているという。また、コロナ禍などの感染症対策として長い時間、マスクを外せなかったことも、唇周囲筋をよく動かして会話することや唇を閉じることへの意識が薄れて

しまった原因の一つになっていると考えられている。

ことばの教室は、早坂氏と子どもたちが互いの口の動きがよく分かるよう、大きな鏡の前で行われる。まずは、手の動きに合わせて唇を開閉したり舌をぐるぐる回したりするなど、念入りに口周りの筋肉をほぐしていく。ミルクせんべいや粒チョコなどの駄菓子を使い、子ども自身が楽しく集中できるよう配慮を凝らしているのも早坂氏ならではの工夫だ。イ列音の構音障がいや「キ」が「チ」になる置換など、子どもそれぞれの苦手な発音を見極め、唇や舌の使い方に気をつけながら丁寧に構音練習が繰り返される。授業で使っている国語の教科書の音読も行い、特に気をつけるべき箇所にくくつもチェックを入れていく。最後に、学



ストローをくわえて口角をアップした形を保つ練習

習の確認と自己評価をシートに書き込んで終了。ことばの教室で学習を重ねたことで、現在は積極的に授業で発表するようになったという3年生の菊池奏心さんは「将来は保育士になりたい」と夢を語り、早坂氏を驚かせていた。

少しずつ変容する過程を確かめながら喜びを共有

構音の改善を目指すことばの教室の学習には即効性はなく、数回練習しただけでは目に見えるような成果は得られない。幼児期の発語から現在に至るまで、日々使い慣れてきた構音の方法を修正することは、子どもにとって時に苦痛を伴うものであると感じているという。正しく発音ができたか、そうでなかったかという結果のみで評価してしまうと、子どもにとってできない後悔の連続につらさを感じてしまうようだ。ゆえに、発音が少しずつつながり変容していく過程をつぶさに見取っていき、それを子どもと保護者、学級担任と共有していくことが重要となる。そのために早坂氏は、子どもの自己評価と学習感想の累積の方法を模索。当初は、達成の度合いを数値線上にポイントする方法を採用していたが、算数の学習で小数や分数の数の大きさを理解させるためタイル図やマス図を使ったところ、飛躍的に理解が進んだ経験から発想を得て、五角形のレーダーチャートに着目。

審査委員より

ことばに障がいのある子どもの支援において、早坂氏の「変容の過程」を大切にしたい実践は重要な意義をもつ。レーダーチャートを用いた実践は児童の自己理解を促し、連絡ファイルや学級通信は「変容の過程」を担う保護者や担任の大きな支えとなっている。「変容の過程」を大切にしたい実践が、ことばに障がいのある子どもの笑顔と意欲を大きく引き出していることに加えて、自らの実践をまとめ、研究発表や研修会講師を務めるなど後進の育成も積極的に行っており、博報賞に値する優れた実践と高く評価できる。

自己評価により線を引いた五角形の大きさを成果を実感させるなど、学びの振り返りを分かりやすく促す改善に努めた。

また、連絡ファイルや学級通信を活用し、ことばの教室における学びの様子や自己評価、学習の感想などを保護者や学級担任と共有。より多くの目で子どもの変化や改善を確認できるように工夫を行った。ことばの教室には、通常学級のように懇談会の場合は設けてはいない。連絡ファイルには保護者や学級担任から寄せられたコメントを掲載し、それぞれの考えを知るための重要な情報交換の機会になっている。どれほど小さな変容であっても、周囲の大人たちが子どもの努力を認め、励ますことによってやる気と自信を喚起し、ことばの教室で学び続けたいと思うモチベーションの保持につながると考えている。

構音指導の学びと意義を新たな担い手へ継承

構音障がいの改善には、子どもたちに学びの積み重ねと忍耐力を求め、その進捗（しんしつ）スピードは緩やか。それでも、長年取り組んできた早坂氏には、その手応えを感じられる機会が多々あったようだ。1年生からことばの教室に通い続けている3年生の佐々木英太さんが「お家でも、お父さんやお母さんと一緒に発音練習を頑張っている」と保護者の理解と協力を得ながら楽しく取り組んでいる状況を語ってくれることは、早坂氏が望んだ方向性そのもの。さらに、ことばの教室を修了した子どもたちが放送委員会に参加していることは、早坂氏にとって想定外の喜びになっている。時折、誤った舌使いに戻ってしまっている場面も見受けられるようだが、指導を受けた経験を思い出し、自発的に修正を行っているという。

何より、発音の誤りのために笑われたりまねされたりして、話すことへの苦手意識を抱えていた子どもたちが、教師や全校児童が耳を傾ける校内放送に自らの意志で参加している事実は、早坂氏にことばの教室を続けるための原動力を与えている。

42年間走り続けてきた早坂氏の教員人生は、残りあとわずか。退任後は、夫婦の趣味である山登りをのんびり楽しみたいと語っているが、壁に貼られたことばの教室のスケジュール表には、隙間なく子どもたちの名前が書かれている。そして、大崎市はもちろん、宮城県全体を通して、ことばの教室を担当する教員の担い手不足と高齢化を憂慮している。早坂氏は、ことばの教室における構音指導のスキルを後進に伝えることも、自らの責務であると考えているようだ。「私は、構音指導や特別支援教育について専門に学んできたわけではありません。だからこそ、特別な研修を受けなければできないことばの教室ではなく、通常学級の担当教諭が自らの指導技術を生かしながら運営できることばの教室を目指してほしいと願っています。そのために、私がこれまで得てきた学びやスキルを伝え、より広がりを得てほしいと思っています」と話してくれた。

企画・制作／河北新報社
営業局掲載分より転載

国語の教科書に細かなチェックを書き加える早坂氏



ブックカフェで行われた「アナウンサー講座」



学びのマップ（職員室廊下）

える化し、図書を活用する場面、地域人材を招く場面を「地図」として共有することで、授業にも活用できるツールとした。

「学校全体が図書館」 創造的な学びの場に

次の勤務地である浜松市立与進北小学校では「つながる学校図書館プロジェクト」のコンセプトを発展させた。学校図書館横のパソコン室を、「ラーニング・コモンズ」の発想によって多機能・多目的ルーム「よきたルーム」に整備した。調べ学習や読書活動ができ、交流が深められる「創造的な学びの場」となった。校長のビジョンを踏まえ、「パソコン室の愛称を募集した際、学校運営協議会の協力のおかげで応募のポスターやボックスを置いていただき、子どもや学校に関わる多くの人から投票やアイデアをいただいた。地域の皆さんの協力を得て、『ひだまり』という名前に決まったときは記念コンサートも開催した」

また、「どこでも図書館」は、図書館補助員と共に階段の踊り場や学年掲示板の前などに、学校のどこでも本と出合える空間をつくり、子どもたちの学習を支えた。さらに、ＣＳと「よきたコミスクカフェ」を開き、学校、家庭、地域がつながる場をもったり、子どもたちが学校

運営協議会委員に自分たちの考えを伝えたりする活動にもつなげた。

地域や歴史を大切に 子どもの笑顔支える

磯部氏は現在、浜松市立蒲小学校の教頭として、校長のビジョンを踏まえ、３年計画の「咲かそう！蒲校プロジェクト」を進めている。同校は児童数約１０００人のマンモス校で１５２年の歴史がある。地域の特色や学校の文化、歴史を大切にし、ＣＳとして学校・家庭・地域とゆるやかにつながりながら、学校として子どもたちの地域愛を育てている。学校運営協議会の熟議を踏まえ、学校支援コーディネーターやＣＳディレクターと共に、子どもと地域をつなぐボランティアのシステムづくりにも努めている。

同校では「町の花づくりグループ蒲」「わくわくお話会」など、継続したボランティアの取り組みが行われてきた。すでに地域に根差した形で続く活動に、学校図書館の「つなぐ」機能をプラスし、子どもたちが地域と出合い、自分自身やその背景となるものへの誇りを育み「一人ひとりの蒲校を咲かせることができるように」が目標だ。

蒲小を含めた３校の取り組みはそれぞれ独立しているものではなく、地域や学校の特性に合わせて発展させている。磯部氏は「汎用性のある実践なので、役立てていただけたらうれしい」と話す。

学校図書館を子ども、教職員、地域の人々が集い、学び、つながる場とする地道な活動が評価されての受賞となった。２０年以上の教職と司書教諭としての経験などから、磯部氏は学校図書館を「常に新しいアイデアで成長し続け、積極的に未知の世界とつながり、自発的に学ぶことの楽しさや喜びを体感することので

きる無限の可能性をもった場所」と捉える。そのうえで「学校図書館を単なる学習センター、読書センターという位置づけではなく、多機能化することで、さまざまな教育課題の解消につながるのではと考えた」

また、活動の原動力として「みんなの幸せ」と「ワクワクする学校づくり」を挙げる。それだけでなく、「たくさんの人々の力で実現し、皆さんの思いやりや優しさで活動ができている。伝えたいのは地域ごとにたくさんのヒーローがいること。感謝を伝え、地域と共にある学校として、みんなの笑顔あふれる学校・地域となっていってほしい」と語る。「学校図書館は多様性・包摂性を併せもち、学びを広げ、深める役割を果たすことができる。学校図書館法で示されるように、図書館は『教育課程の展開に寄与する』場所であり、文部科学省の有識者会議の議論にあるように、学びの深化を担う場所や子どもの居場所、地域をつなぐ場など、教育課程の展開に寄与する存在として、人に幸せを運ぶ場所であると考えている。今後もみんなでアイデアをもち寄り、学校の個性を活かして、みんなの笑顔を育むウェルビーイングの向上につなげていきたい」と話した。

企画・制作／静岡新聞社
地域ビジネス推進局掲載分より転載



磯部真代・浜松市立蒲小学校教頭

静岡県 磯部 真代（浜松市立蒲小学校 教頭）

つながる学校 ～社会に開かれた学びの実現へ～

（独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域）

地域に開かれた学校を 図書館から展開する

グローバル化や少子高齢化など、社会が大きく変化するなかで「地域とともにある学校」が求められている。文部科学省は、学校と地域が力を合わせて学校運営に取り組むコミュニティ・スクール（以下ＣＳ、学校運営協議会制度）を提唱し、各地で特色ある学校づくりが進められている。今回受賞した磯部真代氏（浜松市立蒲小学校教頭）の「つながる学校～社会に開かれた学びの実現へ～」はＣＳの取り組みの一例で、学校図書館を起点に児童、学校と地域をつなぐだけでなく、学校図書館を文化的拠点へと成長させていく活動を展開してきた。

「学びのマップ」作成 教育活動全般を可視化

２０１９年、教職大学院での研究をもとに浜松市立芳川北小学校で「つながる学校図書館プロジェクト」を始めた。「学校は大人になるための準備期間。その過程でさまざまなつながりのなかで子どもが人生を楽しみ、世の中には素敵な大人がたくさんいて、世界が無限に広がっていくと感じる—そんなビジョンを描いて、ブックカフェやわくわくライブラリーなどさまざまな企画を進めてきた。この小学校には第１、第２図書室があり、ある日の第２図書室の来館者が一日に３人のこともあった。もっと子どもたちと心の距離を近づけることで、この宝

箱のような図書室でいろいろなことができるのではないかとプロジェクトを構想した」。例えば、ブックカフェではボランティアによる読み聞かせを皮切りに、アナウンサーを招いた講座や書道講座など学校図書館を拠点に地域に開かれ、つながっていく形が実現した。「ＰＴＡに音楽家の方がいらしゃったというつながりを生かしたり、介護施設で働く方をブックカフェに招いたりした。先生方にも地域の魅力を共有することで教育活動に活かすことができればと考えた。図書委員の子どもたちの『何かしたい』という意見も取り入れた」

また、教職員支援機構の研修で学んだカリキュラム・マネジメントの視点から学校のエデュケーション全般を可視化した「学びのマップ」を作成。図書館との連携を見

審査委員 より

価値が多様化し社会が分断される今の世界では、図書館が人々の対立の拠点になる傾向が生じている。アメリカでは、右派左派両方から禁書に指定された本が増え、図書館が空っぽの学校も増えている。日本でも、人手不足で機能不全の学校図書館が増えている。この時代に、学校図書館を知的交流の拠点としてよみがえらせ、子ども・教職員・地域の人々が学び憩い集う場にする活動には、大きな価値がある。また異動先の各学校において、与えられた立場から、一貫した活動を継続している点にも理念に裏打ちされた教育実践の確かさを読み取れる。



わら束を地面に打ちつけ、もぐら打ちをする子どもたち

宮崎県 さい と し ろ か み 西都銀上学園 し ろ み 西都市立銀上小学校・銀鏡中学校

銀上地域の自然・文化が紡ぐ教育の再生 ～山村留学制度と共に歩んできた30年の取り組み～

(日本文化・ふるさと共創教育領域)

「14日のもぐら打ち!」「畑の隅までもぐら打ち!」。1月14日の夕刻。西都市北西部の銀上地区で正月の伝統行事「もぐら打ち」が行われた。子どもたちが地域の家を訪問。歌いながらわら束をくくり付けた棒で地面をたたき、作物に害を及ぼすモグラを追い払う動きを繰り返し、五穀豊穡を願った。山あいの集落にこだまする子どもたちの元気な声。地元の70代男性は「私も幼い頃にしていた行事が今も受け継がれていてうれしい。山村留学のおかげです」と顔をほころべた。

子どもたちは宮崎県で唯一、山村留学を受け入れている銀上小と銀鏡中の一貫校である西都銀上学園(18人)の児童・生徒たちだ。少人数で教育を受けながら、地域の人とも積極的に交

流し、自然豊かな山里での暮らしや伝統芸能の継承といった体験を通じてたくましく成長していく。高齢化や人口減少に直面している銀上地域にとって住民と学校が一体となって取り組む山村留学は、地域活性化の大きな柱となっている。

人口減を懸念し開始

銀上地区は西都市中心部からクルマで約1時間かかる険しい山間部にある。住民らが「奥日向銀上山村留学実行委員会」を立ち上げ、山村留学を受け入れ始めたのは1995年。地域の主産業である林業が衰退し、人口は

200人ほどまで減少していた。前年には路線バス廃止の話も浮上し、このままでは学校の存続が危ぶまれ、地域が増々衰退していく。強い危機感から生まれたのが、地区外から子どもを受け入れ、地元住民が「里親」として預かって学校へ通わせる山村留学制度だった。



濱砂事務局長と銀上学園の横山校長

当時から実行委員会の事務局長を務める濱砂孝義さんは「生まれ育った地域を守りたいという一心。損得勘定抜きだった」と振り返る。慣れないワープロで募集文書をつくり、県内各地の教育委員会へお願いに回った。新聞に広告を出し、九州各地から留学生を募った。そうして小学生と中学生の初めての留学生2人が集まり、留学制度がスタート。宮崎県内ではその後、他の地域も山村留学を始めたが、子どもが集まらず制度を中止。銀上は唯一継続している地域で、現在は小学生8人、中学生6人の留学生を受けて入れている。

児童生徒の「再生」の場

地域の協力を得て、子どもたちは川遊びや地元特産品である柚子の収穫、はちみつ採り、星空観察、餅つきなどさまざまな自然体験活動を行う。夏になると宮崎県で初めて国の重要無形民俗文化財に指定された「銀鏡神楽」の練習が始まり、有志の手ほどきを受けながら舞手として冬の本番に備える。卒業生のなかには銀上を離れても舞手として神楽に参加するなど、地域の貴重な文化財の伝承に大きく貢献。それは神楽が国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産登録候補に決まったことにもつながっている。

銀上に集まってくる子どもたちの多くは、もともと友人や家族など人間関係の悩みを抱えている。その心が銀上での生活で解きほぐされていく。自然との触れ合いが感情や表情を豊かにし、学校や下宿先でさまざまな役割を果たすことで自信や自己肯定感が高まり、積極性が育まれる。その姿を里親や地域の人たちが温かく見守る。

審査委員 より

県内唯一の山村留学特認校として18名の児童生徒を受け入れている。穏やかな山村地域のなかで、地域の素材や人材を有効活用しようと工夫している。子どもたちは、はちみつ採りや田植えなどの体験学習から始まり、伝統芸の伝承活動に向き合い、文化祭で披露している。この地域の良さをからだで丸ごと味わっている。責任をもって役割を果たし、地域の方に喜んでもらう。こうした達成感の積み重ねによって、子どもたちに何でもできる安心感や自分を肯定できる自信を与えてくれる環境が、山村留学の銀上学園には用意されている。

ある生徒は、中学から銀上へ留学した。内気な性格で、親元を離れての暮らしは不安だったが、里親や留学仲間と過ごすうちに少しずつ自分の意見をはっきり言えるようになったという。「自分が習ったことを後輩に教えたり、学校や地域の行事で司会を務めたりするうちに、どんどん自信がついた。性格が180度変わった」と堂々とした顔つきだ。

横山一憲校長は「小さな学校なので一人一役が当たり前。仲間との協力も欠かせない。1年間で子どもたちは劇的に変わる。生き生きとしていて、問題を抱えていたとは思えないくらい輝いている。多くの子どもたちが救われている」と話す。

銀上は第二のふるさと

30年間で延べ419人の留学生を全国から受け入れてきた。今でも携帯電話やスマートフォン、ゲームは禁止。不便で不慣れな山里での生活。それでも一度結ばれた絆は固く、里親を結婚式に招待したり、わが子を連れて里親

宅を訪ねたりする留学生がいる。

子どもや親の気質の変化、里親の高齢化や確保など事業継続への課題はある。濱砂さんは「集落に子どもの声がかかる」と幸せな気持ちになる。みんなで山村留学の継続を図っていくことが大切」と話し、横山校長も「学校として、もっと地域と子どもたちをつながられる工夫はないか考え続けたい」と賛同する。

この春卒業する中学3年の女子生徒は小学生時代を含め、通算4年間で銀上で過ごした。4月からは西都市外の高校へ進学する。「ここでしかできない体験がいっぱいできた。地域の人との距離が近く、お互い話しかけたり、思いやったり。自分から積極的にコミュニケーションを取れるようになった。里親さんには、血はつながってないけどわが子のように接してもらい感謝の気持ちしかない。ここは本当に第二のふるさと。大人になっても毎年、柚子の収穫のボランティアに帰ってきたい」

企画・制作／宮崎日日新聞社
本文は掲載分より転載

子どもたちも参加する地域の伝統芸能「銀鏡神楽」



資料集を見ながらかるた取りをする阿仁学園の1・2年生



北秋田市の全小中学校で活用されている資料集

地域のことを発信したくなります。北秋田市はきらりと光る魅力にあふれていることが伝わる資料集にすることを重視しました」

低学年も読めるようにすべての漢字にルビを付けた。児童生徒が楽しめる仕掛けとしてかるたづくりの「ワークページ」や全50問の「きらりきたあきた検定」も用意。検定の問題は児童生徒のタブレット端末からも解答できる。

研修会で実践例を紹介 地域で出前講座も開催

資料集を発行した20年度から2年間、学校現場での活用推進に取り組んだ。市教委の研修会などを通じて国語、社会、図工・美術、道徳といった教科ごとの実践例を提示。資料集の各ページの電子データを教諭らに公開し、印刷して活用してもらった。資料集に掲載しきれなかった写真や画像は授業のプレゼンテーション資料として利用できるようにした。

審査委員 より

地域の歴史・文化・魅力を子どもや大人にも親しみやすく、郷土資料集として編集した価値ある取り組みである。資料集の作成、推進、活用と7年間の経過を追ってその時々の実践内容が明確に伝わってきた。多くの郷土資料集は小学校中学年で活用されているが、「きらり☆きたあきた」は小中学校9年間を想定、あらゆる教育活動における児童・生徒の探究心を支え、学びを広げ深める力が宿っている。北秋田への郷土愛が詰まった資料集を通じて、子どもが地域を知ることでのめりに学ぶ様子は魅力的だ。

保護者のほか、地元高校生や婦人会など市民向けの出張授業や出前講座も開催し、資料集をPRした。市民からは「長く地元で暮らしているのに、知らないことがたくさんあって驚いた」などの声が寄せられたという。

「資料集は今や、学習や生活のなかにあって当たり前、使って当たり前のものとなりました」と小林さん。市教委が児童生徒に実施する「ふるさとアンケート」の2024年度の結果を見ると、「ふるさとのことが好き」「大人になってもふるさを大切にしたい」との質問に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童生徒の割合はいずれも9割超。その内訳を資料集導入1年目の2020年度と比較すると、「どちらかといえばそう思う」という回答の割合が減り、「そう思う」が増えていた。

児童生徒の表現力向上 市民の励ましが後押し

小林さんは「資料集の活用を通じて、



資料集を編集した小林陽介さん

秋田県 小林 陽介（北秋田市立義務教育学校阿仁学園 校長）

郷土資料集「きらり☆きたあきた」の 作成・推進・活用によるふるさと教育の充実 (日本文化・ふるさと共創教育領域)

少子高齢化と人口減少が急速に進む県内では、ふるさとに愛着や誇りをもち、地域を活気づける人材育成の重要性が高まっている。北秋田市はすべての小中学校で、郷土資料集「きらり☆きたあきた」を活用した「ふるさと教育」を展開する。市教育委員会が作成したこの資料集は、小学校入学時にすべての児童に配布され、中学卒業までのさまざまな学習や地域活動に役立てられている。児童生徒の郷土愛を育み、表現力や行動力を高める好循環を生み出している。

わくわくするデザイン 検定やかるたも楽しく

小学1年生～中学3年生に当たる1～

9年生の59人が通う同市の義務教育学校阿仁学園。1月下旬の授業で、小学1・2年生の5人が「ふるさとかるた」を楽しんだ。

「木をつきまくる北秋田市の鳥 国内最大のキツツキだよ」。教諭が札を読み上げると、一人の児童が勢いよく絵札に手を伸ばし、元気に答えた。「はい、クマガウです」。児童らは手元に置いた資料集を時々確認しながら絵札を探した。全校でかるたを楽しむ時間も設けられ、学年を超えて交流した。

かるたはすべて児童生徒の手づくり。資料集を参考に文や絵柄を決めた。毎週金曜15分間の朝学習を利用して完成させた。

郷土資料集はA4判、122ページ。

プロローグと、環境、伝統、文化、歴史の4分野、エピソードで構成し、同市の自然や産業、祭り、食、名所などを網羅的に紹介している。編集したのは学園校長の小林陽介さんだ。市教委推進監に就任した2018年度から2年かけて、各地の公民館長や市ゆかりのイラストレーター、商工業者らの協力を得て冊子を作成した。

イラストや写真を大胆に配置した各ページは、さながらガイドブックのようだ。小林さんは「教科書と雑誌の中間のようなデザインをイメージしました。子どもも大人も読んでわくわくする、自由で明るい`新感覚。の資料集をつくりたかったのです」と狙いを語る。「地域のことを知れば、もっと地域が好きになり、



市内にある東京大学の施設取材する子どもたち



OCCの役員会議に臨む子どもたち

千葉県 柏市立大津ケ丘第一小学校

創造力で地域を変える
～未来社会を担う子どもたちの挑戦～

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

学習指導要領は、子どもたちに「さまざまな人々と協力しながら社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となること」を求めている。一方、各種調査では「社会を変える」という意識や自己効力感が十分に育っていない実態が指摘される。背景には、教育課程のなかで地域や社会の課題に目を向け、解決に向けて行動する経験が限られていたことがあるとされる。

そこで柏市立大津ケ丘第一小学校は、「国」という大きな単位ではなく、子どもにとって最も身近な「地域」を入り口にして、社会参画の力を育てる教育課程をつくることを目指してきた。地域を「自分たちが関われる社会」と捉え直すことで、「自分の力で身の回りの世界を変えられる」という実感を積み重ね、創造力に対する自信を育むこと

を狙いとしている。

同校はコミュニティスクールの仕組みを軸に、学校・家庭・地域・行政・企業との連携を深め、学びを再設計してきた。授業づくりでは情報活用能力を土台に、思考と対話を重視する。教員は、子どもたちが「何のために学ぶのか」を実感できる単元設計を意識し、ICT 端末も「特殊な機器」ではなく、考えや思いを形にする手段として位置づけた。子どもたちは課題を見つけ、解決策を考え、試し、発信する。その循環のなかで、学びが地域とつながる手応えを得ている。

地域に寄り添った活動
子どもたち自信深める

実践の柱は大きく三つある。

第一は、デジタルイルミネーションだ。

コロナ禍で手賀沼花火大会が中止となったことをきっかけに始まったもので、6年生がプログラミングで花火映像や自作の音楽、地域の方への感謝のメッセージを制作し、校舎に投影する。4年生も、校舎内を舞台に立体物を使ったプロジェクションマッピングに挑戦した。子どもたちの歓声と地域住民の拍手が響くこの取り組みは、「地域に元気を届けたい」という思いから生まれ、今では恒例行事として定着しつつある。学校発の学びが、地域の「楽しみ」そのものになる経験は、子どもたちにとって成功体験として残る。

第二は「地域の魅力発信プロジェクト」。地域の人や場所を取材し、ウェブページや動画で紹介する。開始当初は子どもたちの関心に基づいて対象を選び、取材を申し込む形で運営していた。だが、「地域の力になる」という目的をより明

確にするため、地域からの依頼を受けて企画・取材・制作・発信までを担う形に発展させた。今回は、6年生が疑似会社「大津ケ丘クリエイティブカンパニー(OCC)」を設立。頼まれごとを「受注」して形にする過程で、相手の意図をくみ取り、限られた時間で情報を集め、伝える表現に落とし込む力が鍛えられる。

子どもたちは、取材を通じて地域の魅力を自分の目で再発見し、発信力と情報活用能力を高めている。「動画を喜んでもらった」(小学6年生女児)「肯定的な反応が返ってきた」(小学6年生女児)と達成感を口にし、「時間配分を考えるようになった」(小学6年生女児)「対話力を生かして初対面の人とも話したい」(小学6年生女児)「いろんな人と接して、寄り添う気持ちを学んだ」(小学6年生男児)と成長も実感する。実践を通じて「小学生にも任せてもらえるほど人々が信頼し合っている」(小学6年生男児)と地域の懐の深さを実感し、子どもたちは「隠れた名所が多い」など地域の強みを確認していく。依頼が学びを動かし、学びが地域の価値を掘り起こす循環が生まれている。

第三は「まちおこし協力隊プロジェクト」としての交流だ。オンライン会議やクラウドツールを活用し、全国の小学校

8校に加え、台湾の小学校ともつながる。互いの地域を紹介し合うことで、子どもたちは自分の地域を客観視し、異なる価値観にも触れることができる。3Dプリンターで地域グッズをつくる「地域ガチャ」や、紹介動画につながるQR

コードの配布など、創造的なアイデアは子どもたち自身が発案している。これらのアイデアが各地に広がり、全国規模のプロジェクトに発展してきた。発信の相手が地域内にとどまらず外へ広がることで、「伝える」必然性が高まり、表現も洗練されていく。

地域の力になれると実感
社会との連携も拡大

活動当初、「地域を変える」ということばに戸惑い、自分ごととして捉えにくかった子どもたちも、継続するなかで前向きに挑戦する姿勢を見せるようになった。デジタルに強く、情報発信ができる点が自らの強みだと、子どもたちも気づいた。実践前後のアンケートでは、「自分には世界を変える力がある」と答えた子どもが29%から85%へ上昇。教員も、数値以上に表情や発言の変化を感じるという。「自分たちの学びが地域の力になっている」という実感が、次の挑戦への原動力にもなっている。

学力面での変化も見られる。市の学力調査では、算数の正答率が活動実施後に平均を上回るようになった。特に記述式問題の得点率が高まり、「考えをまとめて伝える力」「相手意識をもった表現力」の

向上がうかがえるという。地域の課題に向き合い、調べ、整理し、発信する経験が、教科の学び方そのものを変えている。

実践の広がりも大きい。市内の大学や企業、各種団体との連携が、子どもたちの創造力を社会につなぐ橋渡しとなり、地域の人々は協力者から共創者へと役割を変えてきた。佐和伸明校長は、受け身ではなく自ら考えて学ぶ姿勢の重要性を強調する。同校では、地域や家庭、行政、企業など多様な人と理念を共有しながら教育課程を再構築してきた。授業でも情報活用能力を基盤に、思考と対話を重視し、ICT 端末を子どもたちの思いやアイデアを形にする手段として位置づけている。

GIGA スクール構想で一人一台端末の環境が整うなか、ICTは「特別な技術」ではなく、子どもたちの思いやアイデアを形にする道具として日常的に使える。身近な地域を舞台に、学びを社会へ接続する設計ができれば、同様の実践は他校でも十分に展開可能だと見る。子どもたちの一歩が地域を動かし、その手応えが次の一歩を生む。学びの循環が、地域の未来と子どもの未来を同時に育てている。

企画・制作／千葉日報社
東京支社掲載分より転載

佐和伸明校長

審査委員
より

ICTの活用が最終目的になってしまう実践が多いなかで、あくまでも自分の働きかけで地域が変容するのだという学習経験を子どもが重ねること、そして地域を活性化することを目的にする理念がぶれずに貫徹している点が評価された。特に、子どもたちが学習活動を通じてどのように変化したのかが、応募書類に丁寧に叙述されており、学習成果の確かさが説得的に提示されていた。「自分には社会を変える力がある」と答えた児童が3割から8割に増えたという点には、これからの日本社会がより良い方向に変わり得るという希望が見いだせる。



母校の公演で、自身創作のパフォーマンスを披露する吉田桃さん

神奈川県 特定非営利活動法人 ^{こころ たま} 心魂プロジェクト

難病児に届ける“心が動く体験” ～子どもたちの成長と命の輝きを引き出す～

(特別支援教育領域)

心魂プロジェクトは、劇団四季や宝塚歌劇団の出身者を中心に、難病や障がいのある子どもたち、きょうだい児、その家族に向けて本格的な舞台芸術を通して“心が動く体験”そして表現活動の機会を提供している。

2014年に創設。以来、病院や小児病棟、自宅で療養するなど、外出することが難しい子どもたちに“感じる・表現する・つながる”ことをあきらめずにすむよう、病院や特別支援学校などへの訪問公演やオンライン配信を通して、誰もが安心して参加できる体験の場をつくり出している。現在では、難病や障がいのある子どもたち、きょうだい児によるパフォーマンス「心魂キッズ団」を発足させ、その活動は広がっている。

代表理事の有永美奈子さんは「子どもにとって大切なのは“心が動く体験”です。『やってみたい』という意欲、『もっと頑張りたい』という気持ちが、未来を描く力になると信じています」と話す。

子どもに寄り添い、 一人ひとりの可能性を導く

この日、横浜市立北綱島特別支援学校で行われた公演は、各国を訪れる《世界旅行》をテーマにした舞台。公演中盤では、この学校の卒業生で「心魂キッズ団」一期生の吉田桃さん（パフォーマー／りんごちゃん）が登場。先生や生徒が見つめるなか、練習してきたパフォーマンスを見事に披露した。

生まれつき重い心疾患のため入退院と自宅療養を繰り返す生活を送っていた吉田さん。そんな彼女の転機となったのが心魂プロジェクトの月例ワークショップとの出会いであり、プロのアーティストが本気で子どもたちと向き合い、一人ひとりの思いを表現に導いていく場所だった。自分から感情を言語化したり、意志を示したりすることが難しい吉田さんにとって「自分も仲間の一員」と感じるこ

とができた初めての場所となった。

「多くの子どもが観劇体験を通して心を動かされるなかで、“自分も舞台上に立ってみたい”と自ら手を挙げた子どもたちによって生まれたのが『心魂キッズ団』です。私たちは『あきらめないでいい』『やれる方法を一緒に見つけよう』という姿勢で子どもたちと関わります。今日のりんごちゃんのパフォーマンスは自身で創作しました。すごいでしょ！」と笑顔で話す有永さん。「なかには、視線やわずかな動きで意志を伝え、自身のやりたい気持ちを表現する子もいます。私たちは、どんなに重度の障害があっても子どもたちのなかにある意志や可能性を信じて、一つひとつの表現に寄り添うようにしています」と熱を込める。

子どもの思い、 活動に反映させて

チャレンジして、失敗して、子どもた

ちは日々成長する。しかし、難病や障がいのある子どもたちは、その機会が少ないと話す有永さん。そして、自身が初めて病院で公演をした時のことをこう話す。「訪問した場所は、重症心身障がい病棟。長い間病院だけで生活をしている方々です。でも、みんなが私たちのパフォーマンスを受け入れてくれました。その時に、この活動の意味を見つけた気がしました。皆さんから私自身も気づきをもたらえたのです」

心魂プロジェクトでは、子どもたちの表現が自然に引き出せるよう、体調や特性、環境に合わせ工夫をしている。大切なのは、上手に演じるのではなく“今の自分が、今できるカタチで何かを伝えるということ”。たとえ途中で眠ってしまっても、それがその子にとっての大切な表現と考えている。表現手段も自身がパフォーマーとして舞台上に立つだけでなく、視線入力やスイッチなどの入力支援機器などを用いながら、あるいは体調に応じてメタバース参加など、“その子ができる方法”で届けたい、伝えたい思いを表現すること。その創作プロセスをとっても大事にしている。その結果、できた！伝わった！という経験が、子どもたち自身の主体性や自己肯定感を醸成し、社会とのつながりを広げるのだ。

こうした変化は日常の中でも、子どもたちの選択や行動にも表れ始めている。通信制高校への進学を自ら選び、入退院を繰り返しながらも卒業を果たした難病の子、「自分で決めたことはやり遂げる」と自身の体調に向き合いながら自分のペースで学びを続けた子。有永さんは、活動に参加した子どもたちの表情や表現にも「これまで『誰かにしてもらう』から『誰かに届ける』存在に変化している手応えを感じます」と話す。

一方で、活動を継続するための仕組み

づくりにについても前向きだ。「今、必要と感じたらまずやってみること。そして動きながら修正し整えていく」という姿勢で活動を前に進めている。さらに、プロのパフォーマーが作品づくりや公演に集中できるよう、事務や広報活動なども社会人パフォーマーや障がい児の親など多様な人たちの協力を受けながら、プロジェクトの専門性や活動のスピード感を高めている。

多くの人との出会い、 人と社会がつながる活動へ

近年、心魂プロジェクトは持続可能な活動を目指し、若い世代の人材育成に取り組みながら、志を同じくする団体との連携や共催での活動にも力を入れている。そして、講演会や企業、通常学級を含む学校での公演などを通し、命の授業やキャリア教育、共生社会への理解を広げている。

さらに、こうした活動が保護者や医療・教育関係者にとっても子どもたちの可能性を見つめ直すきっかけになっている。通常学級を含む学校から有料での公演依頼が届くなど、“生きるとは何か”“自分らしく生きるとはどういうことか”など、広く社会に開かれた学びのカタチとしても評価が高まっている。

「でも、活動の広がりはこれからです」と話す有永さん。「人と人が出会い、人と社会がつながる。私たちのように熱心に活動に取り組む人や団体は全国に多くあります。そのつながりをさらに築いていきたい。今回の博報賞の受賞は正直驚きでした。でも、子どもたちの成長に少



公演終了後、演者とボランティアスタッフの皆さん

しでも寄与していると受け止めていただけたことはとても励みになりました」。さらに「私たちは、病気や障がいがあるために、どこにも出かけられない子どもたちの選択肢を少しでも増やしたいと思っています。行くか行かないかを自身で選べるように、心魂プロジェクトがそのきっかけになればと思います。いつ何があっても不思議でない子どもたちです。私たちも覚悟をもって活動に取り組んでいます」

子どもたちの主体性を育み、社会とつながる心魂プロジェクト。その活動はさらなる広がりを見せている。

企画・制作／神奈川新聞社
クロスメディア営業局掲載分より転載



心魂プロジェクト
有永美奈子代表理事

審査委員 より

難病や障がいのある子どもとその家族を対象として、「劇場に来るのが難しいなら、私たちが行けばいい」との想いで劇団四季や宝塚歌劇で培った本格的な舞台芸術の公演を届け続けて、心が動く体験や自分らしさを発揮できる時間の創造に継続して努めている。また、子どもたちがパフォーマーとなる「心魂キッズ団」では、子ども一人ひとりの「伝える力」を引き出そうと、個性や特性に応じた表現活動を個々に工夫することによって、子どもの主体的な取り組みが生まれ、自己肯定感を高める活動である点も高く評価された。



未明作品の魅力を3年生が下級生にプレゼン



岩手の中学生とオンラインで文学交流

次に両作家の共通点と相違点をオンラインツールで共同編集しながら議論した。最終的には両校の生徒が協力して一つのプレゼンを作り上げ、動画にまとめるまでに。デジタル世代の生徒たちは、オンラインを使えば距離を超えて交流できることを、教師より先に理解していた。

交流はデンマークにも広がった。小川未明が「日本のアンデルセン」と呼ばれていることから、アンデルセンの母国・デンマークの中学生との交流を行った。時差があるため動画サイトを使ったオンデマンド形式を採用。アンデルセンの代表作『人魚姫』や未明童話の感想、日本とデンマークの文学の読み方の違いを、英語でコメントし合った。

さらに、2023年度、岩船教頭はもう一人の地元作家・杉みき子(1930年～)に着目した。当時すでに90代でなお健在だった杉氏の作品には、上越の方言や雪の風景が色濃く描かれている。上越の情景が感じられる杉氏の作品は、生徒にとって小川未明よりも身近な存在だ。そこで、まずは岩船教頭が杉氏の自宅を訪ねてインタビュー動画を撮影した。そこで杉氏が語ったのは「物語をつくるために大事なことは、常に『物語の種』を探すことなんです」ということば。生徒たちはそれを受けて、一人500円を持って地元商店街の朝市へ向かった。地域の人と交流しながら買い物をし、そこで「物語の種」を見つけた。

また、杉氏の童話で上越の方言に触れ

た生徒たちは、祖父母にインタビューするなどして、方言を調べ始めた。「家族のなかでの会話が増えたと、保護者たちからも好評でした」と岩船教頭。身近にあることばや風景が物語の材料になる、そう気づいた生徒たちから「上越を物語で残して本にしたい」という声が自然と上がった。そこで、その思いを形にするため、小川未明や杉みき子の文体を参考にして方言などを織り交ぜた作品を一人ひとりが執筆。表紙のイラストも生徒が手がけた。こうして生まれたのが、3年生105人の創作物語集『がんぎの町の物語』だ。ここには日常のなかにあるちいさな奇跡、人と人とのつながり、この町への愛情がそれぞれの視点で描かれている。公開授業にて生徒たちが朗読すると、参観者が涙を流すほどの感動を呼んだ。

グローバルな実践が育んだ地域への誇り

これらの活動は、岩船教頭一人で行ったわけではない。国語科の同僚がバディとして一緒に授業をつくり、上越教育大学の小埜裕二教授と渡部洋一郎教授、市の学芸員が専門知識を提供した。「産官学が連携したからこそ実現できた活動でした」と岩船教頭は感謝を込めて語る。

また、ICTのデジタル機器は活動の重要なツールだったが、それだけでは不十分だったという。岩船教頭自身、岩手やデンマークへと足を運び、現地の教師と対話を重ねた。オンラインとオフラインを使い分け、教師同士が密に連携することで、活動が深まっていったのだ。

郷土作家の研究活動による、生徒たちの変化は確かなものだった。「童話を読むのが好きになった」「国語の先生に憧れるようになった」など、卒業生からそ

んな声が届く。「将来は文学研究者になりたい」という夢をもつ生徒も現れた。この活動は地域でも注目され、小川未明についての学習に魅力を感じ、同校への入学を希望する小学生もいたという。「未明の学習をする学校」という認識が定着し、学校の文化となっていた。

博報賞の審査では「郷土作家を起点としたグローバルな実践がなされている」と評価された。「全国には、地域にまつわる文学作品や行事が多く存在します。この実践は、それぞれの地域に応じて再構成が可能だと認めていただけたことが、何よりうれしかったです」と岩船教頭。消えゆく方言や文化、伝承文学を後世に残す。郷土文学の価値は、そこにあると考えている。

この実践を通じて、生徒たちは文学の意味を自分のことばで語るようになっていった。ある生徒は「文学は今と過去をつなぐタイムマシンだ」と表現した。小川未明の名作『野ばら』では、隣国同士で戦争で引き裂かれる兵士の友情が描かれる。作品を学んでいた時期に、現実世界ではウクライナ侵攻が起きていた。「国と国が争っていても、人と人はつながれる。文学には、今の時代を生きるヒントがある」と生徒たちは気づいたようだ。文学を通じて過去を知り、今を考え、未来を想う。郷土文学が育んだこうした学びは、生徒たちのなかに確かに根づいている。

企画・制作／新潟日報掲載分より転載



杉みき子氏に創作物語集を寄贈する岩船教頭

新潟県 いわ ぶね 岩船 尚貴 (柏崎市立南中学校 教頭)

ふるさとをことばで継ぐ子どもたち ～郷土作家を起点とした物語創作と文学交流～

(国語教育領域)

「オンライン授業と休校の繰り返しで、子どもたちのなかに閉塞感が漂っていました」。こう振り返るのは、上越教育大学附属中学校で国語を教えていた岩船尚貴教頭(現・柏崎市立南中学校教頭)。2021年、新型コロナウイルスの感染拡大で先の見えない状況が続くなか、どんな授業ができるのか模索していた時、ある講話で地元の童話作家・小川未明の生涯を知り、授業のヒントを得た。

上越市出身の童話作家・小川未明(1882～1961年)は、スペイン風邪に罹患し、自身の子どものも感染症で亡くした経験をもつ。そこから児童文学に活路を見だし、子どもたちに希望を与える作品を生み出していった。「感染症の時代を生きた未明と、コロナ禍の私たちの状況が重なって見えなんです。この時代を生きる希望を、文学から見いだせるのではないかと思います」と岩船教頭。しかし、小川未明の作品を読んだことのある生徒は1割未満だった。身近にいる偉大な作家を、地域の子どもたちが知らない。この現状が、授業の出発点となった。

作家への親近感が生んだ生徒主体のブックトーク

授業は小川未明の童話30編を生徒のタブレットに配信するところから始まった。著作権フリーの作品をデジタル配信することで、生徒たちは時間や場所を問わず作品を読める。また、学校から徒歩10分の場所にある小川未明文学館へ、国語の時間を使って通った。未明の生涯をつづったドキュメンタリーや書簡などの展示を鑑賞するなかで、生徒たちは作家の人柄にも触れていった。早口で話す肉声を聞いて「せっかちで短気な人だったんだろうね」と笑い、上越在住時代に高校を中退した経歴も知る。完璧な偉人ではなく、親しみを感じられる人物だと分かった。こうして人柄と作品の両面を知ること、生徒たちの関心は深まっていった。

未明童話の魅力を知った生徒たちは、自分の好きな作品を選んでブックトーク形式のプレゼンテーションを企画した。

同じ作品を選んだ生徒4～5人がグループを組み、タブレットを使って共同編集でプレゼン資料を作成。3年生が下級生に魅力を語った。どの作品が好きなかの人気投票では意外な結果が出た。代表作『赤い蠟燭と人魚』より、短編『野ばら』の方が圧倒的に人気だったのだ。「短くて読みやすく、休み時間にさっと読める。その気軽さが魅力だったようです」と岩船教頭は語る。学年を超えた交流のなかで、文学を楽しむ空気感が生まれていった。

岩手・デンマークとの交流と物語創作

2022年度には、岩手大学教育学部附属中学校との文学交流がスタート。その際、生徒から「オンラインで一緒に、作品を紹介するプレゼン資料をつくりたい」という提案が出て実践することに。まずは地域の童話作家を学ぶ学校同士、お互いの代表作を読み合う。小川未明の作品を岩手の生徒が、宮沢賢治の作品を上越の生徒が読み、感想を伝え合った。

審査委員より

個人としての受賞ではあるが、学校全体、さらには学校を超えた広がりのある活動となっている点、また、郷土作家を起点としながらも、作品の読解にとどまらず、物語を創作したり、他県や海外の同世代の生徒と意見交換を行うことで同様の作家や作品とを比較分析したりといった、多様なことばの学びが実現されている点が高く評価できる。全国には、地域にまつわる文学作品や地域に根差した行事などが多く存在する。岩船尚貴氏の実践は、それぞれの地域に応じて再構成が可能であり、他の教育現場にとって多くの示唆を得られる実践である。



50周年記念公演を終えた大鹿中学校の生徒たち
※写真提供／大鹿村立大鹿中学校

長野県 大鹿村立大鹿中学校

生徒と地域で紡ぐ中学校歌舞伎公演会 ～50年の軌跡と未来へつなぐバトン～

（日本文化・ふるさと共創教育領域）

文化の担い手を 地域ぐるみで育てる

下伊那郡大鹿村は、南アルプスと伊那山脈の谷間に位置する山村。村には300年以上前の江戸時代から伝わる地芝居「大鹿歌舞伎」があり、国の重要無形民俗文化財に指定されている。同村にある唯一の中学校、大鹿中学校では、全校生徒が地域の伝統文化を学ぶため、大人たちが演じる大鹿歌舞伎の演目に取り組み、毎年秋に自主公演を開催。地域の大人たちが学校と協力して「文化の担い手」を育て、子どもたち自身も自らの成長を感じながら地域文化に触れる営みは50周年を迎え、持続可能な地域づくりの一端を力強く担っている。

大鹿歌舞伎はもともと、村内の集落ごとに伝えられてきた地芝居で、各集落の神社に奉納する形で公演が行われてきた。戦後の高度経済成長期に入ると、若者が都会へ流出するようになり、村は過疎化が進む。集落ごとに芝居を維持する

ことが厳しくなり、1956年、一つにまとまって保存会ができ、村を挙げて維持していくことになった。現在では毎年5月と10月に定期公演が行われている。

過疎化を背景に立ち上がった 「歌舞伎クラブ」

中学生は、大人たちが行う公演に参加する一歩前の段階だ。村に保存会ができてほしく、「中学生たちにも歌舞伎を体験させてあげたい」という声が起こったのは、地域文化の担い手をしっかり育て、若者たちが村に愛着をもってほしい、という願いが強まったからだった。

この頃、大鹿村には「鹿塩中学校」と「大河原中学校」の二校があった。1975年、地域の人々の願いを受けて、鹿塩中学校に「歌舞伎クラブ」が誕生。これが今に続く活動の始まりだ。指導役を買って出たのは、当時、保存会で中心的な役割を務めていた村職員の片桐登さん（1928～2025年）。また、当時の

先生たちも「学校のなかで学ぶだけでなく、地域のことを幅広く学ぶなかでふるさとへの大切さを知る機会をつくりたい」とクラブの設立を認め、後押しした。

村内の二つの中学校は1980年に統合され「大鹿中学校」となり、歌舞伎クラブはそのまま新校でも引き継がれた。授業時間内に行う「課内クラブ」での活動で、片桐さんの熱心な指導に、生徒たちも楽しみながら取り組んだ。

生徒の熱意が 存続の危機を救う

しかし、中学校の歌舞伎クラブは、スタート直後から大きな壁に突き当たる。当時、村は過疎化が進んで財政状況も厳しく、村職員の片桐さんが、勤務時間中に歌舞伎の指導を行うことが、村議会で問題視された。「それほど歌舞伎の指導がしたいなら、村役場を辞めるべきではないか」。今では貴重な地域文化の伝承も、当時の状況では理解しがたい活動と見なされたのだ。



地域の大人たちが、中学生に熱心に指導。
舞台にかける思いも伝わる

その危機を救ったのは、当時の生徒たちだった。「どうか片桐さんを辞めさせないでください」「私たちはもっと歌舞伎を学びたい」。村長のもとにこうした手紙が届き、その願いが聞き入れられて、指導は継続できることに。その時に、中学校での歌舞伎学習の強い土台が出来上がった。

一人ひとりの思いに寄り添い、 成長を見守る

大鹿中学校の生徒数は、1970年代半ばには100人以上いたが、平成の初めころには40人前後になり、さらに減る傾向が続いた。歌舞伎クラブの活動は、課内クラブから総合的な学習の時間で行うようになっても、希望者が集まる形で続けられてきたが、2009年からは全校生徒で取り組むようになった。

活動は、新学年がスタートする4月から、公演を行う9月まで。基本的には1年生が舞台の裏方である「黒衣(くろこ)」を務め、2・3年生が役者を務める。片桐さんの志を受け継ぐ、村職員の北村尚幸さんをはじめとした「大鹿歌舞伎愛好会」の会員による指導のもと、生徒は中学での3年間を通して「一つの舞台にはさまざまな関わり方があり、それぞれの役割を責任をもって果たさなければ良いものがない」ことを学ぶ。

生徒の中には「裏方なんてつまらない」

と思う子もいれば、「恥ずかしくて演じることができない」と思う子もいる。それでも、黒衣を務める中でその役目の重要さに気づいたり、裏方として役者を見ることで「自分ならこうしたい」と意欲が湧いたりすることもある。長いせりふを覚えたり、難しい所作を人前で見せたりすることで、自分に自信がもてるようになることもある。同校の先生たちは、一人ひとりの生徒の思いに寄り添いながら、歌舞伎を通して成長する様子を見守る。

自分自身の成長を実感する生徒たちも多い。「大きな声でせりふが言えるようになった」「練習では苦労したけれど、仲間と協力しながら自分の役割をしっかりとこなそうと思うようになった」「教えてくれる地域の先生や、公演のために舞台の準備をしてくれた大人たちに感謝の気持ちをもった」……。生徒たちは活動を通し、やがて自分たちが村の文化の継承者になることをしっかりとイメージしているようだ。

50周年記念公演が成功、 活動を未来へ

2025年9月28日、大鹿中学校の体育館で行われた公演は、中学校での歌舞伎学習が始まってから50周年の節目を記念して行われた。この日の演目は「六千両後日文章 重忠館之段」（ろくせんりょうごじつのぶんしょう しげただやかたのだん）。平家滅亡後、源氏方に捕らえられた平清盛のひ孫を助けようと、平家の落ち武者の悪七兵衛景清（あくしちびょうえかげきよ）が戦いに挑む一という物語で、大鹿村だけに伝わる脚本だ。

役者が登場する花道など舞台の設営やさまざまな準備は、例年の公演と同様に

生徒の親たちが引き受けた。そして客席には生徒の家族だけでなく多くの村の人、さらには村を離れたかつての卒業生などの姿も。例年の2倍となる約300人もの観客が見守るなか、生徒たちは約1時間半の大作をやり切った。体育館に響いた満場の拍手は、生徒たちの熱演に対してだけでなく、地域の人々の熱心な教育活動が50年の永きにわたって続けられてきたことを称賛して送られたようでもあった。

大鹿中学校の生徒数はこのところ20～30人ほどで推移している。村には豊かな自然環境を求めて都会から家族で移住してくる人も多く、同校にも移住してきた生徒がいる。そうした生徒たちも、歌舞伎を学ぶなかで大鹿村の伝統文化に触れ、地域への愛着を深めていくという。

同校の田代博子校長は「地域のことを学びながら、自分なりの課題を見つけたら、その解決に主体的に取り組んだりする姿勢も身につけることができます。ここを巣立った若者たちが、地域文化の担い手となり、ここで後継者を育てていく。そうしたサイクルができていくことにも、大きな意義を感じています」と話し、村の未来へとつなげる活動を地域の人々と共に発展させていきたいと願っている。

企画・制作／信濃毎日新聞
本文は掲載分より転載



多くの観客が詰めかけた記念公演

審査委員 より

50年にわたり中学生による歌舞伎を支えてこられた地域の教育力、生徒一人ひとりが自信をもてる充実した学び、少人数の生徒数という課題を乗り越え、持続可能な仕組みで公演が続けられてきたことが高く評価された。大鹿中学校における歌舞伎の取り組みは、生徒がふるさとの伝統に誇りをもち、地域の人々の支えを受け止め、自身の主体性や内面の成長を育む確かな教育活動と言える。まさに地域と学校が連携して教育を進めるコミュニティ・スクールのモデルとなる。未来につなぐバトンということで、今後への期待も高まる。



小学4年生の日本語の授業風景

静岡県 学校法人 ムンド・デ・アレグリア学校

母語教育で「豊かな心」と「考える力」を、日本語教育で「生きる力」を

(日本語教育領域)

南米日系人の子どもが 学べる学校をつくる

静岡県浜松市にあるムンド・デ・アレグリア学校は、ブラジルやペルーなどの南米日系人の子どもたちが通う外国人学校だ。現在、幼稚園から高校生までのクラスがあり、約200名の子どもが通い、母語と日本語によるバイリンガル教育を受けている。

製造業が盛んな浜松市は、1990年の改正入管法施行を契機に、南米日系人労働者が急増。労働者の親と共に来日する子どもたちも増加した。2003年に本校を開校し、現在も校長を務める松本雅美さんは、元々、地元の大手自動車メーカーで南米日系人の採用担当をしていた。当時、市内にブラジル人学校は5

校ほどあったが、ペルー人学校は一つもなかった。会社退社後も日系人との付き合いを続けていた松本さんは、ペルー人の保護者からペルーの公用語であるスペイン語で勉強できる場所をつくってほしいと懇願される。そのときを振り返り、松本さんはこう話す。「日本の学校に通い日本語で日常会話はできるようになっても、学習上必要な学習言語能力が育たず学業不振に陥る。また、子どもたちは母語も確立できていない上、忘れてしまうこともある。成長期である大切な時期に親子の会話が成り立たなくなることは大きな問題だった」。学校でも家庭でも自分の思いがうまく伝えられず、いじめにあったり、孤立する子どもは少なくなかったという。

「私は教員免許を持っていたし教えることは好きだったので、寺子屋のような場

所をイメージして学校をつくったら数々の困難が押し寄せてきた」と苦笑する。設立する学校は「私塾」だとされ公的援助が得られず、校舎や資金の確保は進まない。松本さんは私財を投じて事務所を借りてようやく開校するが、あれほど学校を望んでいたペルー人も開校説明会には50家族参加したのに入学したのは13名。経営赤字は続き、この先の道はないと閉校を決意した松本さんだったが、そこに朗報が届く。学校存続を望む地元企

ムンド・デ・アレグリア学校 松本 雅美 校長

三重県出身。南山大学外国語学部イスパニア学科卒業。スズキ株式会社人事部採用課で日系人採用を担当。2002年、在東京ペルー総領事館主催の教育フォーラムに総領事より要請されボランティアとして参加した際、ペルー人保護者に「浜松にスペイン語で学べる学校を創って」と懇願される。私財を投じて「ムンド・デ・アレグリア学校(歓びの世界)」を設立。



業53社から寄付を受けたのだった。「企業の支援は社会的信用も得られ、ターニングポイントとなった」。その後、学校法人の認可を受け、生徒数も増加。2010年には浜松市が旧町役場を学校施設に改装した校舎に移転し、現在に至る。

日本語教育の指導法や 教材を独自に開発

本校では「母語教育で豊かな心を育み、日本語教育で生きる力を身につける」をモットーに、子どもたちが将来の夢をもち、自分の未来を自分で切り開く力を育むことを目指している。全国の南米系外国人学校で唯一、スペイン語圏の子どものためのペルー課程とポルトガル語のブラジル課程があり、それぞれ母語と日本語の両輪での教育に取り組む。その理由を松本さんはこう話す。「子どもが思考力や自らのアイデンティティーを育み、母国への誇りをもつために母語の教育は必須。そのうえで、第二言語としての日本語指導に力を入れ、地域社会に溶け込めるよう日本の文化や習慣、マナーを教えている」。

日本語教育においては、日本語に苦手意識をもたないよう、独自の指導法や教材を開発した。例えば、ペルー課程のひらがな表には、「あ」にアルパカ、「ま」にマチュピチュなど子どもたちになじみのある絵が描かれている。漢字指導では、漢字の「形」と「意味」を母語で学ぶ。象形文字である「人」や「木」は絵の中に漢字を入れ込み、絵で表現できない場合、例えば「休」は「人が木の横で疲れて休んでいる」と教える。他にも漢字学習へのモチベーション向上のために漢字道場(漢字昇級試験)の実施や、日本語能力試験(JLPT)への挑戦を勧め、各レベルの対策講座

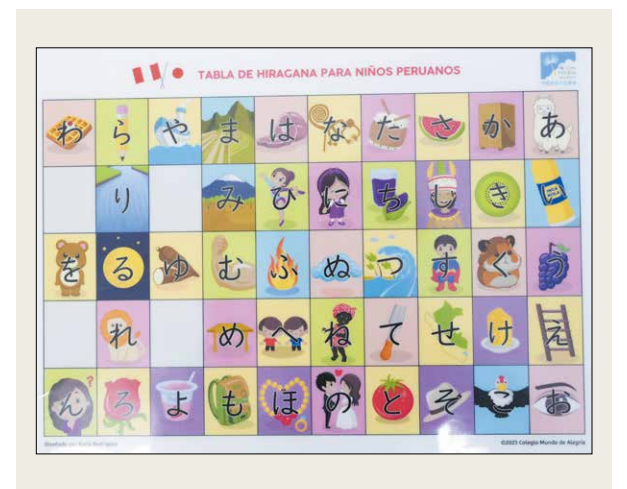
も開講。子どもの学習意欲を引き出すためのさまざまな工夫を凝らす。また、外国人労働者の定住化が進む市内において多文化共生社会を目指し、地域のお祭りなどに参加し、地元の人々や日本の子どもたちとの交流も積極的にを行っている。

この日、取材したのは、小学4年生の

日本語の授業。教室から聞こえてきたのは、日本語の歌だった。日本人教師が教壇に立ち、子どもたちは「♪1日、2日、3日～」「♪月曜、火曜、水曜～」「♪優しい、悲しい、うれしい、難しい～」など日本語の単語をメロディーに乗せて歌い、楽しみながら学んでいた。授業に出席していた子ども二人に学校のことや将来の夢を尋ねると「僕は日本語や漢字を勉強するのが好き、折り紙を折るのも好き。将来の夢はサッカー選手。ずっと日本で暮らせたらいいなと思っている」。「学校では先生が勉強をしっかり教えてくれる。私はアートが好きで、将来は服のデザイナーになりたい。東京にも行ってみたい!」。二人とも目を輝かせて答えてくれた。

日本と南米の架け橋に なる人材育成を目指す

松本さんに今後の展望を聞くと「地域の南米系外国人学校のなかで、モデル校(センター校)になること」だと語る。地域では母国に帰るための教育のみの学校もあるというが、子どもの将来を考えると、バイリンガル教育を



ペルー課程のひらがな表と漢字指導の教材

実践する意義を強く感じているという。「親の就労に左右され、いつまで日本に住むのか分からない不安定な環境で学ぶ子どもは多い。そのような状況でも母語と日本語ができれば、子どもたちの未来に選択肢の幅がぐっと広がる」。実際に卒業生の進路は多様だ。日本の大学、専門学校への進学、地元企業へ就職するケース、母国の大学やアメリカの大学へ進学する生徒、母国の大学で医学部へ進学し医師を目指す卒業生もいるという。「日本とペルー、日本とブラジルの架け橋となるような人材に育ててほしい」と力を込める。

「ムンド・デ・アレグリア」とは、スペイン語で「歓びの世界」という意味。「多文化共生も学校運営も決して簡単ではないが、すべての子どもに学ぶ歓びを知ってほしい。そのための努力は惜しまない」と松本さん。創立から20余年、子どもたちの夢がふくらみ、笑顔が弾ける学び舎は、地域と共に歩み続ける。

企画・制作／中日新聞
メディアビジネス局掲載分より転載

審査委員 より

母語による教育と日本語教育の両方を丁寧に行うことにより、子どもが自らのアイデンティティーを確立し、学力や日本で生活するための適応力を身につけることが可能になっている。存続の危機に見舞われながらもさまざまな立場の人々から協力を得て、現在では地域に根づいている様子がよく分かる。とても素晴らしい実践で、国語教育の立場からも学ぶところが極めて多い。子ども一人ひとりの母語の学びと日本語の学びを充実させるために、ひらがな表や漢字指導法などのメソッドが多彩に生み出されていることを高く評価することができる。

地球人として
応援し続けたい

三木市の在住外国人は２９９３人（２０２６年２月末）。アジア各国からの技能実習生を中心にこの１０年間で約３倍に増えており、支援が行き届いていない子どもも大勢いる。「公的な受け入れ環境整備の必要性を訴えているのはもちろんですが、地域にも寺子屋のような場所が自発的に生まれてくれればと期待しています。私たちも最初は５人でごんまりと始めましたから」と河越さん。高い潜在能力を発揮して成長する子どもたちから多くを学び、やさしい日本語で伝えようとすることで思考力も高められるなど、大人も活動から得るものは多い。

河越さんや大西さんが「民族や国籍を超え、『地球人』として彼らを応援し続けたい」との思いで続ける活動は、創立当時に掲げたスローガン「ひとつの地球ともに生きる」やＳＤＧｓの目標の一つ「誰一人取り残さない」を確かに実践している。

企画・制作／神戸新聞社
掲載分より転載



「知らない国で知らない言葉を突然勉強しないといけなくなった子どもたちのストレスは計り知れず、当初は孤独感や孤立感や劣等感を募らせている子どもたちが大半でした。それでもボランティアの皆さんを中心に大人たちが真摯に向き合うことで、半年から１年後には次第に口と心を開いてくれるようになります」と同協会でも河越さんと二人三脚で活動を進める同協会理事の大西慶志さん。

「長く座ってられない子には『トイレは学習の前に』と声がけしたり、漢字練習のときには『書きながら読みを声に出そう』と根気強くコツを伝えたりしていると、徐々に落ち着いて学習に意欲を出してくれる子が増えました」と河越さんも振り返る。

学習を超えた活動が
自信につながる

大学生による防災学習、地場産業の職人を招いた出前講座などを企画し、学習一辺倒にならないよう工夫をしているのも特徴的だ。昨春に実施した淡路島へのバス旅行では、準備段階で子どもたちが

自分のやりたいことを主張したり仲間がしたいことを尊重したりしながら、日程プログラムを日本語で作成して大きな達成感を得た。

学校生活では支援されることの多い子どもたちが、ここでは主体性を発揮できる。そういった自己肯定感の高まりによって、年下の子や自分より後に日本へ来た子を積極的にサポートする姿が見られるなど、さまざまな好循環が生まれている。居心地よく過ごせる場所からその一歩先へ、着実な前進を見せているのが最近の「みきっす」。将来的には自信をつかんだ子どもたちが後輩のロールモデルとなり、支援する立場に成長することが期待されている。

地域の理解が広がっているのも朗報の一つだ。地元の飲食店が、外国人の子ども支援として「Ｓコイン」というプロジェクトを２０２４年から始めている。売り上げの一部が「みきっす」に寄付されるほか、イベントなどで「Ｓコイン」を貨幣として使用できる仕組み。協会主催のイベントで、買い物を楽しむ子どもと対応する店員との交流も生まれているという。

審査委員
より

子どもたちの状況を勘案し、子どもたちに寄り添い、居場所を提供している様子がうかがえる。また、そうした支援者の存在が、子どもたちの学びや成長を促し、次の一歩を生み出している。教室にとどまらず、体験活動で子どもたちが主体となる機会を設定していること、「Ｓコイン」プロジェクトにより地域住民と子どもたちが触れ合う機会を創出していることなども、高く評価された。日本語を学ぶだけでなく、さまざまな人と関わる機会を通して、子どもたちが地域の一員として成長していく取り組みの継続と発展を期待する。



3Dプリンターを用いたキーホルダーづくりのワークショップに参加する子どもたち

兵庫県 三木市国際交流協会

多文化多言語の子どもとの居場所づくりを
通して共生を学ぶ

（国際文化・多文化共生教育領域）

三木市国際交流協会の「こども日本語教室みきっす」が開かれるのは金曜日。アフガニスタン、シリア、中国、ネパール、ベトナム、ミャンマー、ラオスの７カ国の小中学生十数人が公民館に集まる。この日は児童発達支援を行う同市内のＮＰＯ法人「そいる」のワークショップが行われていた。タブレットを手に３Ｄデータづくりに挑戦する子、自分の考えたキーホルダーが目新しい３Ｄプリンターで形づくられていく様子に興味津々な子……。他にもボランティアに学校の宿題を見てもらう子、友達同士で日本語のカードゲームをしている子など、さまざまな児童・生徒がリラックスした表情で過ごしている。「ここは多文化多言語の子どもたちが日本語を学び合う場所。学習だけでなくとどまらず体験活動も取り入

れながら、子どもたちに寄り添う居場所づくりを目指しています」と同協会事務局長の河越恭子さんは話す。

半年から１年で
ようやく言葉を

三木市国際交流協会は１９９６年、国際交流についての理解と関心を高めるために「ひとつの地球 ともに生きる」などをスローガンに創立された。活動の転機となったのが２０１５年。国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）の仲介により、中東・アラビア語圏から複数の家族が転入してきたことだった。２０１１年から始まったシリア紛争での国外避難者は約４００万人にも上り、一部の人々が日本にも逃れてきていた。

日本の小学校で国語科を習っても、「聞く」「話す」「読む」「書く」の実用的な日本語能力が身につくわけではない。ゼロレベル（全く日本語が話せない）の子どもたちを何とか支援したいと、同協会は２０１６年の夏休みに高校生有志やボランティアと共に市内の小学校へ出向き、絵日記や工作づくりなどをサポートする「にほんごdeまなぼう」の前身の教室を企画。それを受講した保護者らの熱い要望を受けて、２０２０年に「こども日本語教室みきっす」が発足した。

「みきっす」は定期的に日本語学習を行う場として年間約３０回開催している。退職教員ら２０人近いボランティアが１対１に近い割合で手厚いサポート体制を取っているが、その関係づくりには時間を要する。



借りていた本を返却するために学校司書の前に並ぶ児童

岡山県 倉敷市立旭丘小学校

豊かな読書生活の推進 ～ことばの力をもとに豊かな人間形成を図る～

(国語教育領域)

週に一度、国語の時間を利用して倉敷市立旭丘小学校（倉敷市連島町連島）の児童は学校図書館を訪れる。図書館にやってくると、児童はまず借りていた本を返したり、新たに本を借りたりと司書の前に長い列をつくる。その後は思い思いに本棚をのぞき込み、気になった本、司書のおすすめの本などを手に取っていく。児童に話を聞くと「物語で急にすごい事件が起こったり、最後に成功したりすることが面白い」（2年女児）、「生き物の成長の様子が分かる図鑑を読むのが好き」（4年男児）などと読書の魅力や読書を通じて興味をもった事柄について元気に教えてくれた。

同小は2016年から図書館の活用を通じた豊かな読書生活を推進。読書の量、読書の質、授業との関連、豊かな体験の4つを柱に、それぞれの目当てを相互に関連させることで、ことばの力をもとに豊かな人間形成を図っている。

児童の読書量増加 取り組み前の3倍

読書量を増やす取り組みの中心は「読書通帳」。全児童が本を読み終わった日付や題名を記録し、学年によって短い感想や満足度も書くことで、児童自身の読書の歩みを示す履歴になっている。自分

が何冊の本を借りて読んだか、何を感じたかを振り返ることで、本を読む意欲を高めるのが狙いだ。

この取り組みの効果は顕著で、開始前の2015年度に1人当たりの年間平均貸出冊数は33・2冊だったが、開始直後の2016年度に同75・5冊になり、多少の増減はあるが右肩上がりに増加している。2023年度には同97・6冊



「1年で100冊読んだよー。」胸を張って、学校司書から多読認定証を受け取る児童(左)

と2015年度の3倍近くになった。

読書の質の向上では、倉敷市の教師や司書などが作成した推薦図書の冊子を活用している。物語など子どもたちに人気のあるものだけでなく、社会科学や自然科学、産業といった10分類から、年齢に応じて選定された良書が掲載されており、幅広いジャンルに興味をもってもらえるよう、工夫が凝らされている。

このほか推薦図書を読むごとに、冊子の読んだ本の項目にシールを貼って達成感が感じられるようにしていることや、年間の読書目標を達成すると同小のゆるキャラ「あさもりちゃん」シールがもらえることが児童のやる気を盛り上げている。また10分類の本をそれぞれ1冊以上読むことで図書委員手づくりのしおりがもらえる「読書ビンゴ」もある。毎年10月には「学級対抗秋の読書運動会」を1カ月かけて開催。同小全校児童が紅白に分かれて貸出冊数を競う。いずれも子どもたちの興味が途切れないようにするための“作戦”だ。

このような取り組みで特に人気なのが「多読認定証」。図書館の本を年間100冊読んだ児童を表彰するもので、達成者は表彰状を贈られるだけでなく、図書館に名前を張り出されてお祝いされる。児童が互いの読書意欲をリスペクトし合うきっかけになっている。

地域住民の協力や 児童発の取り組みも

授業と連携した「並行読書」も導入。国語の教科書に載っている作者の別作品や伝記を読むことで、作者の生み出した世界観や時代背景を把握し、教科書の内容をより深く理解する取り組みだ。また地域住民の協力を得て、季節ごとの田植えや稲刈り体験、餅つきなどを児童が実



地元の読書ボランティアチームによる毎週金曜朝の読み聞かせは、旭丘小で約20年続いている

践する活動を、生活科や総合的な学習の時間といった授業で行うほか、土曜開催の地域支援活動でも実施。毎週金曜の朝、地元有志が同小を訪れて行う、読み聞かせやストーリーテリングもあり、子どもたちは言葉から物語の風景を想像する力を知らず知らずのうちに培うことができる。

これらの体験は児童の言葉の土台になるとともに、本に書かれた言葉の奥深さに気づいたり、さまざまなことに興味をもったりするきっかけにもなる。読書は児童の心の糧となり、友だちや教師、地域住民への共感や敬意も生み出す。同小は、この好循環を地域ぐるみで生み出している。

児童発の取り組みも数多く誕生。学校司書や図書委員らによるおすすめの本を紹介する張り紙に刺激を受け、一般児童も本の紹介カードを手づくりするようになったほか、読書週間などには図書委員の5、6年生が下級生の教室を訪れ、絵本や紙芝居の読み聞かせを披露するなどしている。いずれも児童が自発的に始めた活動で、6年の図書委員は「低学年の子が拍手してくれたり、感想を話してくれたりするとうれしい。また頑張ろうとやる気が出る」とうれしそうに話していた。

読書習慣を身につけ 人生を豊かにしよう

「小学生時代に身につけた読書習慣は一生の宝になる。多彩な語彙や社会常識といった知識、落ち着いた生活態度などが身につき、豊かな人生を送るうえで必ず役に立つ」と話すのは同小の藤田哲彦校長。「推薦図書の活用や読書通帳、読書に関するさまざまな取り組みのおかげで、本校の子どもたちはほとんど読書が好きになり、読書を通じて児童同士のコミュニケーションの輪が広がるという非常に良いサイクルも生まれている」と評価する。

同小の教師らは「読書教育を今後も進め、未来の見通せない時代をたくましく生きてほしい」と願っている。読書活動をますます充実させるため、今後はNIE（教育に新聞を）も導入する。図書館に多くの種類の新聞を置き、児童が時事問題に関心をもち、読書の幅を広げることが狙いだ。社会の変化や時代に応じ、取り組みを進化させ、子どもたちの健全な成長を支え続けたいと考えている。

企画・制作／山陽新聞社
メディアビジネス本部掲載分より転載審査委員
より

「読書通帳」や「推薦図書」、読み聞かせ、『『おすすめの本』読書ビンゴ』などの工夫によって、子どもたちの生き生きとした読書活動を生み出していることが素晴らしい。子どもが他の読者となつながらことによって、一人ひとりの読書行為は活性化され、読む文化が育まれるということを豊かに実践し、証明した。また、協働の読書活動を通じて、人と人との関わりを築く「ことばの力」が育つことを明らかにし、「ことば」への信頼を育てる。そのことが人の成長に何よりも大切なことだと旭丘小学校の取り組みは教えている。



スクールドッグは授業中も教室を歩き回って愛想を振りまき、児童らの“癒し”に

岡山県 津山市立西小学校

100年後も豊かな津山城西へ！ ～学びの意義を高めるPBLの実践～

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

学校での学びが将来、何の役に立つのか分からない。かつて津山市立西小学校（津山市小田中）が行ったアンケート調査で、約3割の児童がこう答えたという。「子どもたちに学びの意義を体感してもらえる授業が必要だ」と同小教諭たちは痛感、熟慮のうえで誕生したのが2022年度から行っているPBL（課題解決型学習）「かすちゃんタイム」だ。

児童の思いや問題意識を大切にしたい実践的な学習としてかすちゃんタイムは誕生。子どもたちが問題を見つけ、解決方法を調べたり、自分たちで考え出したりするだけでなく、解決に向けて実行・検証するのが特徴だ。

理想の未来像考え 地域課題を探究

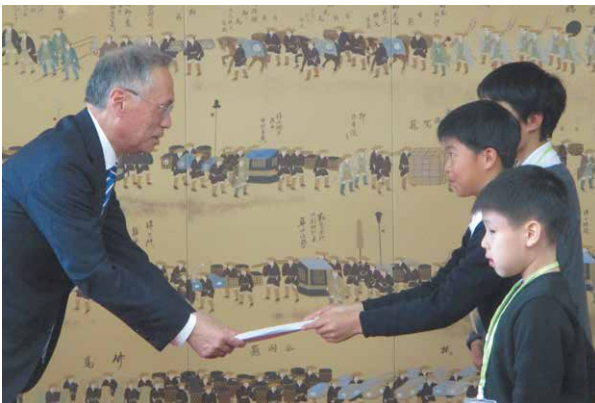
4～6年生が総合的な学習の時間を

使い、7～12月までの計35時間を実施している。7月にスタートするとまず自分たちの住む津山城西地区がどんな地域かを調べたり、100年後の地元がどうなっているかを想像したり、どんな社会であれば「豊か」なのかを定義。「100年後も豊かなまち津山城西の実現」を大きなテーマとし、一人ひとりが理想像を形にする。そして夏休みの課題の一つとして理想と違う部分や、地域の人困っている“問題”を探るのが、かすちゃんタイムの第一歩だ。

2学期には児童の找つけた課題を、内容によって「観光」「食」「つくる」の3つの「ラボ」に

振り分け、プロジェクトグループをつくる。同じ問題に興味をもった児童が学年を超えてグループをつくる点も特徴。これは同小が1学年1クラスの小規模校なのも理由の一つだが、「子どものニーズに全力コミット！」を合言葉に児童のやる気を大切にしているからこそその仕組みだ。

この後、児童は問題解決のための企画



ラッピング電車の企画書を谷口圭三市長(当時)へ手渡す児童＝昨年11月

書の書き方を学んだり、相談相手を選定したりしながら、プロジェクト内容を充実させ、3人の教師に合格をもらってから実行・検証に入る。課題の見つけ方から、問題をどう論理的に解決するかの発想、限られた時間でプロジェクトを完成させるためのスケジュールリングまで、実社会でも役立つ考え方やメソッドを身につける。学校側も児童をさまざまな形でサポートしており、特に専用ポータルサイトが注目を集めている。

同サイトはインターネット検索大手が提供するクラウドビジネスを活用し、同小の宮澤康平教諭が構築。思考ツールやICT（情報通信技術）ツールが備わっており、電話のかけ方や商品の販売方法といった、社会人のマナーなども分かるようになっている。児童はデジタルマップ上に気になった場所や内容を記録し、計画の進行も管理。児童同士が相互に記録を閲覧できるほか、過去のプロジェクトのまとめを参照することもできる。また幅広く展開される児童のプロジェクトを少数の教師がきめ細かく指導する際にも役立っている。

児童が主体的に発案 市や企業から助言も

2025年度は4～6年生計86人が19プロジェクトに取り組んだ。観光振興や地域活性化、地域清掃などの分野で、子どもならではのユニークな発想の活動が展開され、関係者から高い評価を受けた。このなかから特に注目度の高かった2例を紹介する。

一つは犬と触れ合う教育活動「スクールドッグ」を同小に招くプロジェクト。きっかけは自宅で犬を飼い始めた5年生が「犬がいれば学校がもっと楽しくなる」と思いついたこと。校内で「犬



教師が制作したポータルサイトを活用し、ICTで児童の探究をサポート

が学校にいることをどう思うか」というアンケートをとり、賛成多数という結果から、日本スクールドッグ協会に相談、地元で活動する犬のハンドラー・井上政弘さんとラブラドルレトリバーのまりんちゃんにつながった。まりんちゃんは昨年10月から12月まで計7回来校。授業中に児童の座る机の間を巡回したり、休み時間に児童と触れ合ったりと大活躍した。「かわいくて、癒やされた」「学校に来る楽しみが増えた」と子どもたちの評判も上々だった。

二つ目はJR津山線にラッピング電車を走らせようというプロジェクト。発案した6年生は津山を訪れる観光客数やJR津山線の本数などを調べ、観光客を増やすためのアイデアとして提案。津山市の観光振興を担当する職員やJR西日本岡山支社の社員を招き、ラッピング電車の効果や観光振興の必要性をプレゼンテーション。両者からの指摘や修正案を受け入れて完成させたラッピング電車の企画書は、昨年11月27日に津山市役所を訪れた児童から谷口圭三市長（当時）へと手渡された。発案者は「関係人口の増加にとどまらず、津山市の人口を増やしたい」と高い目標を掲げている。

学びの大切さ実感し 社会参画の意欲に

かすちゃんタイムにおける同小の方針は、子どもの「したいこと」を優先し、活動を通じて可能性を伸ばしてほしいというもの。考え方や調べ方の基礎を教えたり、校外の自治体や企業への連絡などで教師がフォローする部分もあるが、実践面で決定権をもつのは児童。子どもたちは主体的に行動するなかで、学ぶことの大切さを実感し、達成感を得ている。宮澤教諭は「期間を決め、問題の発見から解決策の策定、検証まで行うことを通して、^{みじ}自ら舵を切る。体験をすることが大切だと考えている」と話す。

同小の小椋行治校長は「校内にとどまらない活動の広がりが、子どもたちの興味を満たし、社会とつながる実感を与えてくれている。人として社会に主体的に参画する意欲を培ってもらいたい」と期待する。

企画・制作／山陽新聞社
メディアビジネス本部掲載分より転載

審査委員 より

津山市立西小学校は、学校教育目標の具現化に向けて、総合的な学習の時間を中核として学習活動に取り組んでいる。特に、児童が日常生活のなかで感じる問題意識を起点にして、企画書を作成し、社会とのつながりを意識して課題を解決していく必然性を感じられるようにしている。また、児童一人ひとりが自分のペースで探究的に学べるように、専用ポータルサイト「Wiz」を構築し活用していることは、これからの教育に求められる教育支援の在り方として評価できる。



塩と氷でつくるアイス：マイナスの概念

埼玉県 地球っ子グループ

外国ルーツの子どもたちの全人的成長を目指した地域での活動

(国際文化・多文化共生教育領域)

地球っ子グループは20年以上、外国にルーツをもつ子どもたちが十分な日本語学習ができる場所を提供し、彼らが安心して共に語り集えることを大切に活動に取り組んでいる。

ただ単にその場限りの支援を行うのではなく、一人ひとりの「できるようになったこと」「できるようになりたいこと」に目を向け、ポートフォリオ的資料を活用しつつ、子どもたちが自分自身の具体的な成長を視覚的に自覚し、自信がもてる実践に重点を置いている。特に、子どもたちの「やりたい」と思う気持ちを尊重した活動の場づくりは秀逸だ。例えば、「地域の役に立ちたい」という気持ちに

は、ツル取りボランティアから多くの地域の方々に感謝されるという、貴重な機会を設定している。

さらに、学習指導においても、既存の教材やプログラムではなく、子どもたちの主体性を尊重し、学びへのモチベーションを高めている点も大変興味深い。「考える力」を意識した取り組みは、基本的アカデミックスキルに加え、企画力や話し合いの力、協力などの多くの学びが得られる場となっている。



ボランティア活動「ツル取りボランティア」の様子

日本語学習が必要な子どもたちのみならず、保護者やOB・OGも含めたサポートが丁寧に提供されている取り組みには、目を見張るものがある。特に日本語学習に必要な教材に関して、子どもたちの個性やバックグラウンドに応じて形式陶冶を念頭に置き、創意工夫を凝らしつつオリジナリティあふれる検討がされている。また、学習を進める子どもたちのモチベーションを維持させるべく、仲間や地域との関わりのなかで「学びたい!」「分かった!」といった経験が蓄積されるような教育実践が重視されている。

審査委員
より



白神山地での実地踏査の様子

青森県 神田 昌彦 (弘前市立南中学校 校長)

環境再生活動の普及と定着を目指したESDの展開

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

総合的な学習の時間などによるさまざまな活動を通して、生徒が多様な生命が織りなす自然の美しさや巧みに気づくとともに、地球環境の保全や自然復元活動の必要性を実感することで、自然再生活動を推進し持続可能な社会を構築していこうとする態度を育成している。

具体的な活動としては、総合的な学習の時間において、生徒・学校とNPO団体が協働して、「弘前だんぶり池づくり」に取り組んだ。このことで、生徒の社会参画意識や当事者意識を涵養した。また、休日の奉仕活動として、「白神山地ブナ林再生事業」に参加し、世界遺産周辺地域でブナ伐採後に植林されたスギのなか

で生育不良のものを除去してブナ林を再生させる活動に取り組んだ。さらに中学校理科2分野「生物のつながりと生態系」をベースにしたSTEAM教育を推進した。これらのことで、環境問題への興味・関心や活動への意欲が向上し、生徒が自己の生き方について考える教科等横断的な学びを実現した。

こうした探究的な学びを、総合的な学習の時間を中核とした教育課程に位置づけたり、校務分掌組織に担当者を配置して、全校組



だんぶり池づくり～雑木の抜き取り作業～

近年の自然環境の変化により、自然と人間との関わり方が見直されるからこそ、生徒一人ひとりが自分と環境との関わりを地域で学ぶ意義がある。そこで環境問題に視点を当てて、白神山地を教材化して総合的な学習の時間や理科などで、自然環境を再生させる活動に取り組む。また、地域の団体と連携・協働し、継続的な取り組みとなるようにした。さらに、理科の授業で、白神山地の環境について模擬実験を通して理解を深めることなどの教材研究も深く進んでおり、体験を通して学ぶことで深い意味理解を促す学習過程を創造している点が評価された。

審査委員
より



Xmas Charity Concert



自然体験活動キャンプ ほうとうづくり体験の様子

千葉県 きみつ少年少女合唱団

被災地に「歌のちから」を届け続ける子どもたち

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

きみつ少年少女合唱団は、子どもたちの芸術文化と豊かな人間性の育成を目指し、2000年に設立された。設立翌年に起きたアメリカ同時多発テロをきっかけに、子どもたちが「歌で誰かの役に立ちたい」と自ら発案し、チャリティーコンサートを毎年開いて、アフガン難民支援、自然災害による被災地の支援、さらには困難な状況にある子どもたちを支援する活動を、20年以上にわたって継続してきた団体である。

特に、東日本大震災後は宮城県で毎年「復興応援コンサート」を開催してきた。コロナ禍で一度は中断を余儀なくされたが、子どもたち自身の提案で公演を復活

させ、現在まで続けられており、子どもたちの思いが継続の原動力となってきたことは特筆に値する。さらに合唱団は、定期演奏会に加えて地域イベントなども積極的に企画・実施しており、地域においても高齢者や障がい者、被災者など多様な背景をもつ人々が集い、つながり、交流する場として評価されている。

指導者は、「合唱を通して子どもたちの心の成長を促したり、生き方を豊かにすること」を第一に

考えた指導を行っており、そうした子どもの成長に心を動かされた保護者やOB・OGが、途切れることなくボランティアで運営を支えてきた。



きみつ少年少女合唱団の団員指導者の集合写真

東京都 特定非営利活動法人 しゅわえもん

聞こえない大人(ろう者)がろう児に手話で自己表現する場を提供する

(特別支援教育領域)

聞こえない子ども(ろう児)が、人と関わり社会の中で生きていくためには、手話を習得し、言語の基盤を築くことが重要な課題となっている。しゅわえもんは、課題を解決するために、19年にわたり「ことばの力」を育む取り組みとして、聞こえない大人(ろう者)が聞こえない子どもに手話で自己表現する場を提供してきた。「絵本と遊びイベント」は、イベントを通じてことばの理解を広げ、きょうだいや保護者との活動を通して、自分を表現する機会としている。「デフ・メロウ・キャンプ」では、手話で話す仲間や大人と出会い協働することで、楽しみながら手話による話し合いを

体験する。「ろう学校等での絵本読み語り派遣」では、学校などで手話による絵本の読み語りを行い、子どもが手話の紹介と視覚的表現を直接見て、スタッフとのやり取りを通じて手話やことばの世界を広げる。「しゅわえもんニュース」配信は、手話やことば、知識を増やすだけでなく、手話を知らない子どもや大人にも理解の機会を提供している。こうして聞こえない子どもたちは、同じ困難を経験し乗り越えてきた聞こえないスタッフとの

交流を通じて具体的な解決方法を学んでいる。しゅわえもんは聞こえない子どもたちが、輝いて自分を表現できる人へと成長することを目指す取り組みを、長年にわたり継続してきた。



SDGsイベント 絵本読み語りワークショップ

審査委員
より

地域に根差した合唱団活動が、25年にわたって継続されていることが評価された。アメリカ同時多発テロをきっかけに「歌で誰かの役に立ちたい」と願う子どもの思いが継続の原動力になっていること、合唱を通してグローバルな視野をもつ多彩な支援活動が展開されていることに独創性がある。被災地宮城県に毎年合唱団として赴くことも、決して容易ではないであろうに、コロナ禍での中断も乗り越えて子どもたちが活動を復活させたこと、保護者やボランティアが途切れることなく団の運営を維持していることにも、心から敬意を表したい。

審査委員
より

聴覚に障がいのある子どもには、言語習得においてさまざまな課題があることが以前から指摘されており、そうした子どもとその家族を支援するために、2005年から19年間にわたり、継続的に取り組んできた活動である。人工内耳や補聴器を使って聴覚を活用する聞こえない子どもの言語習得において、聞こえる保護者がその支援に十分な役割を果たすことは、決して容易ではない。主なスタッフである聞こえない大人がロールモデルとなるこの活動は極めて重要であり、子どものことばの獲得に大きく貢献している点が高く評価された。



地域の方と一緒にデコイを設置し「つる来いコール」

山口県 周南市立八代小学校

八代の自然を守り継承する八代っ子の育成 ～ナベツルの保護活動を通して～

(日本文化・ふるさと共創教育領域)

かつては、たくさんの鶴が日本各地に渡来してきたが、今では希少なことである。八代地域では、毎年渡来するナベツルへの愛情から、餌を与えるなどして保護し守り続けてきた。八代小学校の児童は、30年以上前から地域と共にナベツル保護の精神を代々受け継ぎ、年間を通してさまざまな活動を行っている。例えば保護者や地域の方が参加するなか、児童がオリジナルの合唱奏を披露するなどしてナベツル渡来を願う行事「つるよ来い集会」の開催。また、ナベツルを観察する人々が気持ちよく過ごせるよう「つるのねぐら整備」への参加を通じた清掃活動、さらにはナベツルが八代に

初渡来した日から5・6年生が毎年「つる日記」を作成・発行し、八代地域の全戸に配布することや、地域の方も観覧に訪れる「やしろフェスティバル」にて、児童らが生活科や総合的な学習の時間に行ってきた観察や調査による研究発表などである。いずれもナベツルにまつわる学びや行事の中で、地域の方と触れ合い、共に活動することで、ふるさとへの誇りと愛着が形成されていく。八代の自然保護を児童に託すうえで、大規模な

ナベツル保護を行う鹿児島県出水市への視察（小学校6年間のなかで一度は視察に訪れる）も行っている。その運営は地域の大人が担うなど、地域の力がこの実践を支えている。



「つるよ来い集会」で渡来日予想の集計を発表

審査委員
より

ナベツルの保護を中心として総合的な学習の時間や特別活動など、カリキュラムを柔軟に組んで学びが拡張していく。水辺の生態系に関する知識を得ながら水質調査、環境整備、つる日記の作成、それらの活動を周知する発表の場など、ナベツル保護に関する探究的な学習が充実している。学校生活の軸に、また、子どもの心にナベツルがいて、時に見えないナベツルと対話をしながら学びが展開していく。子どもが保護活動に取り組むことは地域住民にとって明るい希望であり、地域活性化につながる点も高く評価された。



上越市無形文化財「嫁祝い」の継承

新潟県 上越市立谷浜小学校

地域連携による「ふるさとに愛着をもち、 地域と共に歩む子ども」の育成

(日本文化・ふるさと共創教育領域)

1980年に桑取川漁業組合と連携して、サケが遡上する桑取川について知り、川を守る学習から始まった。地域の諸団体との連携により、ふるさと学習は深化・発展を遂げていく。子どもたちは自然や歴史の体験学習を通して自分ごととして積極的にに関わり、繰り返しの学びでふるさとへの愛着を確実に深めていった。最初は1980年からのふるさと学習Ⅰでサケの卵飼育と稚魚の放流を進め、「川サミット」で学習成果の発表を行ってきた。また2004年からのふるさと学習Ⅱでは、魚の森づくりのために市民の森の保全活動を実施してきた。さらに2016年からはふるさと

学習Ⅲで「里神楽」の舞を「里神楽伝承会」の方々の指導を受け発表会を実施している。2016年からふるさと学習Ⅳが同時に進み、上越市無形文化財「嫁祝い」「焼き草集め」など伝承活動に励んでいる。なお、2017年から始まったふるさと学習Ⅴ「義の塩」づくり体験は、コロナ禍前の2019年まで「食文化」をテーマにした総合的な学習として進めていた。児童の願いをもとに計画を立て「地域をもっと知りたい」という思いを深めてきた結果



江戸時代から続く「里神楽」の舞の伝承

審査委員
より

1980年から44年以上にわたり、公立小学校において継続して地域の環境を教材にした教育を実践している。学習指導要領が改訂されたり、教員の異動があったりするなかで、継続した実践が公立学校においてできたのも、児童のふるさとに対する願いや想いを大事にしてきた結果だと言えるだろう。44年以上にわたり自然や歴史に積極的に関わり、繰り返し学ぶことによって、ふるさとへの愛着を高める教育を積み重ねてきたことは、貴重なことと言える。教師が地域の諸団体や住民と交流し、地域のリソースを活用できるように挑み続けてきた努力の証である。



地域日本語教室活動・BBQの様子

熊本県 NPO法人 外国から来た子ども支援ネットくまもと

外国ルーツの子どもたちの日本語教育、学習支援 進路保障および居場所づくり

(国際文化・多文化共生教育領域)

NPO 法人 外国から来た子ども支援ネットくまもとは、外国にルーツをもつ子どもたちの主体性を尊重し、20年以上熊本県内で活躍を続けている。特筆すべきは、かつて県内に散在していた子どもたちへの支援体制をネットワーク化し、そのハブ的存在となっている点である。

具体的な支援として、子どもたちに関する支援者間での情報共有や連携がきめ細やかになされている点、子どもたちが主体となって、学習を進めたり、自身のキャリアについて考えたりする場を設定するなど、取り組みが立体化されていることは、波及効果が期待できる。また、

性別やルーツなどを同じとするグループで活動するだけではなく、それらを異とするグループにより、互いの個性と良さを尊重する機会が設定されている実践も、ユニークなものになっている。

さらに、子どもたちのみならず、保護者の方々も巻き込んだ支援の在り方も興味深い。保護者の方の日本語のスキルアップはもちろんのことだが、日本の教育における家庭学習の位置づけや、子どもの学習状況の共有なども行われ、さまざまな角度から子どもたちとその保護者を

包括的に支えるシステムを構築している。このことで、子どもも保護者も共に心のよりどころを見いだすことが可能になっている。



日本語支援活動・たけんちの様子

審査委員
より

かつては散在し、各々の場所で行われていた子どもたちへのサポートをネットワーク化し、支援者同士の連携が強化されたこと、加えて、中心的機能を発揮し、熊本県内の子どもたちへの支援をリードした取り組みは、大変素晴らしいものである。その結果が、すべての子どもたちがサポートを受けられる、今日の状況につながっている。子どもたちも自他の「良さ」に目を向け、自分自身のキャリアと真剣に向き合っている。この実践がモデルとなり、子どもたちへのサポートネットワークが多くの地域で構築されることが期待される。



地域の方々の協力を得て行う太鼓の練習

宮崎県 都農町立都農中学校

地域文化の継承と子どもの成長をつなぐ学び ～都農神社夏大祭を中心に据えた実践～

(日本文化・ふるさと共創教育領域)

本実践は、37年の長きにわたり「都農神社夏大祭」に中学生が関わることで、地域文化の継承と子どもの成長をつないできたものである。子どもたちは、地域文化に触れることで自らの存在価値や役割に気づき、自己肯定感を育んでいく。活動は、総合的な学習の時間に位置づけられ、「ふるさと学習」というテーマのもとで実施されている。主となるのは都農神社の夏祭りへの参加（神輿担ぎ、太鼓台担ぎ、太鼓演奏）だが、準備の段階から保護者や地域の有志の支援による太鼓台の装飾物の制作や設置など、祭りの実現に向けて必要な活動に携わっている。都農神社宮司による祭りの由来に関

する授業や地域の祭り関係者による講話などを経て、子どもたちから「もっと地域の人の話を聞きたい」「自分たちで絵本をつくりたい」「来年の子たちのために記録を残したい」という声が上がリ、祭りの由来を絵本にまとめる活動や美術部による絵馬の奉納へと発展していく。消極的な態度を示していた子どもたちも、祭りという地域の行事に向き合うなかで自分の役割を見だし、責任をもって行動する姿勢が芽生えてい

く。「自分もこの祭りの担い手になれる」「誰かの役に立っている」という実感から、ふるさと（自分の居場所）への誇りと責任感が育まれていく。



祭り当日の様子

審査委員
より

都農神社夏大祭に中学生が参画する実践。1987年から長きにわたり継続されてきたことも高く評価された。開始当初は、その時代における中学校特有の課題を解決すべく、地域の教育力を必要とした切実な取り組みだった。夏祭りの歴史や背景を知り、準備から運営に至るまで生徒の手で行う様子は、地域文化の担い手としての中学生の姿を具現化する好事例である。祝祭性のなかで地域が“みんなの居場所”となり行事をつくり上げることは、生活に元気が漲り、子どもから大人まで、地域全体が笑顔になることを本実践は示している。



南総文化ホールでの特別公演「キッズ落語見参」

千葉県 南房総三龍亭

キッズ落語プロジェクト

(日本文化・ふるさと共創教育領域)

小学校教員が落語出前授業を通じてその魅力に出合い、教育意義を実感したことに本実践は始まる。実際に十数年にわたり落語家の社会人弟子として落語を習いつつ、落語を教育に活かす実践研究を積み、学校や地域に貢献すべく「南房総三龍亭」が設立された。活動の大きな柱が学校と地域を結ぶ「キッズ落語プロジェクト」である。子どもが伝統的な言語文化である落語に親しみ、演じることを通じて、地域とつながるなかで他者と関わりながら主体的に人生を切り開いていく力の育成を目的としている。

安房地域における小学校の子どもたちに、落語の出前授業を通じて、落語の基

礎知識、演じ方の実習、落語の鑑賞体験を行っている。また、子どもたちや地域住民を対象とした各講座や公演活動の実践を通じて、継続的に落語に親しみ学ぶ機会を提供している。何事にも消極的だった子どもが落語を演じたことをきっかけに自信をもち、生活全般で見違えるほど明るく意欲になる、落語で複数の人物を演じる稽古を通じて他者理解につながるなど、目覚ましい変容と成長がうかがえる。子どもの活躍もさることながら、本実践は大人が

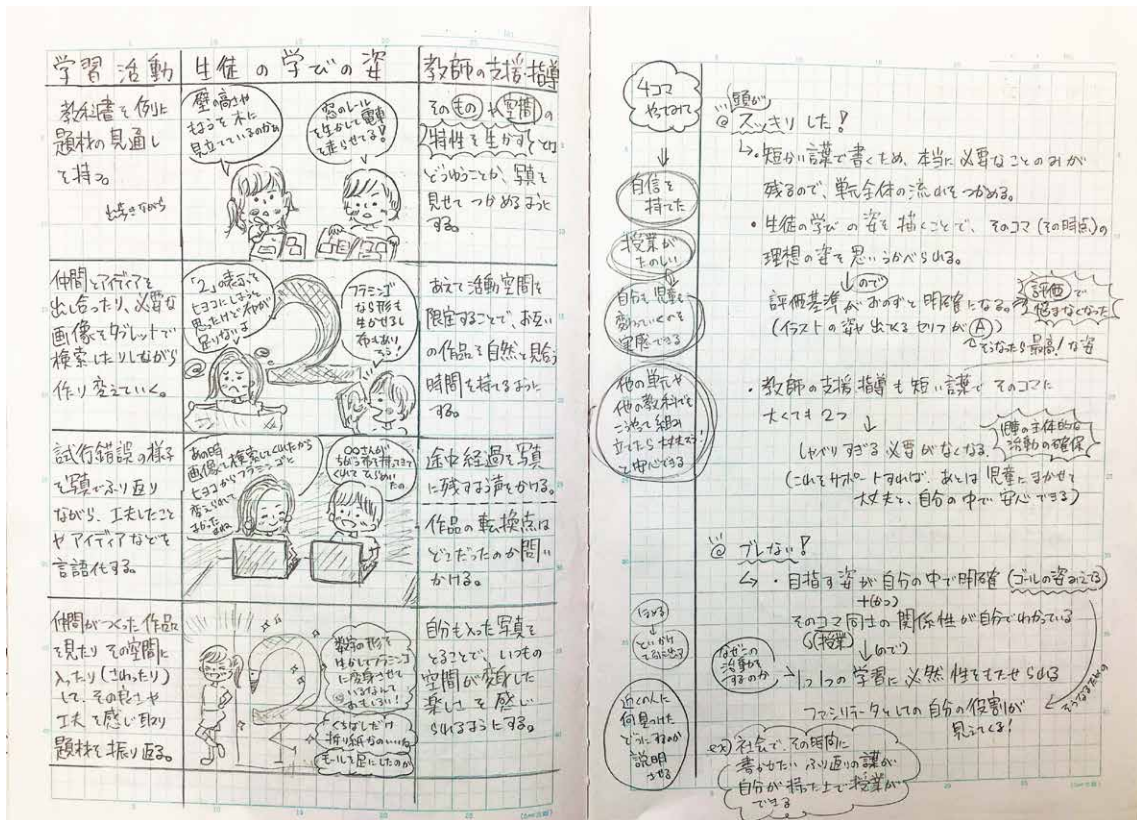
憧れる世界に向かうなかで、子ども共にも憧れをもって日本の伝統文化に親しんでいく学びの構造がある。



学校落語授業。扇子と手拭いをいろいろな物に見立てる

審査委員より

落語などの伝統的な言語文化の学び手が、地域文化の担い手として成長するプロジェクトである。元小学校教員が中心となる「南房総三龍亭」は、学校への出前授業に加え、地域での公演や夏休みの落語教室など多様な活動を展開し、子どもが落語や講談を通じて成長する姿を支えている。本団体が学校教育での経験を活かし、地域と学校を豊かな文化でつなぐことに貢献していることに敬服する。子どもが一人で舞台上に立つことの重みとやりがいのなかで、地域の人々からの賞賛を得て自信をつけていく過程は意義深いものである。



4コマ漫画指導案を用いた授業デザイン

群馬県 豊岡 大画 (太田市立城東中学校 教頭)

4コマ漫画指導案を活用した、授業改善につながる持続可能な研修の取り組み

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

授業を構想するうえで、大切な学習指導案に4コマ漫画の形式を取り入れた「4コマ漫画指導案」を開発した。このことで、日々の授業を教科の目標を達成するために改善していくことや、より効果的に続けやすくすることで、教員の負担を減らすことができた。具体的な形式は、1コマ目に子どもが見通しをもつ姿、2コマ目と3コマ目に本時の授業の目標に向かう子どもの姿、4コマ目に子どもが学びを振り返る姿を描くようにした。子どもが学ぶ様子を絵と吹き出しで具体的に表現するとともに、教師の発問や働きかけ、環境構成や教材の工夫なども取り入れた。このことで、教師が授業を構

造的に捉えられるようになり、教師が「させる授業」から子どもが「する授業」へと主体的・対話的で深い学びを促進した。さらに、期待する子どもの姿を明確にすることで、指導と評価の一体化による授業改善にも寄与した。

このような授業によって、子どもが見通しをもって活動する時間が確保され、活動の振り返りでは自

分の思いを自分なりに工夫して活動したことについての記述が多く見られ、満足度が高い様子が見られた。



児童の振り返り

審査委員より

4コマ漫画指導案づくりは、教員の指導力向上、単元全体や本時をふかんに見る目、授業を起承転結で捉えることなどの良さを明らかにした。また、4コマ漫画指導案を基にして質の高い授業を実践した。このことは、4コマ漫画指導案を構成する要素に、見方・考え方を働かせた学習活動、教師の発問、子どもの活動や発言など、指導に必要なことが端的に明示されているからである。このような分かりやすい指導案は、教育関係者以外の授業づくりの理解にもつながり、社会に開かれた教育課程の実現に向かうことが評価された。



同じ境遇の友達と痛みも喜びも分かち合う



招聘青年から現地での取り組みの説明を受ける中学生

東京都 特定非営利活動法人 メタノイア

難民申請者の子どもと地域社会をつなぐ 日本語教室「Mutlu わらび」

(国際文化・多文化共生教育領域)

特定非営利活動法人 メタノイアは、クルド人難民申請者の子どもたちが多く暮らす川口市で、制度的に不安定な立場に置かれる難民・移民の子どもに着目し、ことばの壁や差別的言動により不安を感じる、未来への展望が見えづらい子どもたちに寄り添い、子どもたちの居場所となる「Mutlu わらび」の活動を行っている。「Mutlu」とはトルコ語で「幸せ」を意味することばである。

丁寧なアセスメントに基づくカリキュラムの作成とそれに基づく学習支援やスタッフと子どもたちとの丁寧な対話もさることながら、この活動の特色となっているのは、当事者性のあるクルド人ス

タッフの存在である。さまざまな制度的制限があるなか、自分の未来を見いだせない子どもたちにとって、クルド人スタッフは日本社会で生きるロールモデルとなっている。学習支援により、分かること・できることが増え、ロールモデルに触れることで、子どもたちは自尊心を取り戻し、自分自身にも可能性があることに気づいていく。

同じ背景をもち、困難を抱える子どもたちが仲間を見つけ、未来を切り開くきっかけが得られる居場所。そしてそこで、子どもたちが日常のささやかな、

そして自分の人生の「Mutlu」を見つけることを願う。そのような居場所が「Mutlu わらび」である。



日常の授業風景：日本語教師からことばを学ぶ

審査委員
より

制度的に不安定な立場に置かれたクルド人の子どもたちに、丁寧なアセスメントによる学習支援や、「Mutlu day」のようにクルド語を用いて自由に過ごせる機会の提供は、子どもたちの学びや自己肯定感の向上に大きく寄与している。また、当事者性のあるクルド人スタッフの存在も、子どもたちが自身の可能性に気づくために大きな役割を果たしている。これらの点が大きく評価された。当事者団体とも連携していることから、当事者との共創モデルとしてさらに活動を発展させ、発信していくことを期待する。

神奈川県 湘南とアジアの若者による未来創造事業実行委員会

絵本で子どもたちの 世界をひろげるプログラム

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

絵本プログラムは、日本の生徒が開発途上国の貧困問題と向き合うために、インドネシア語の絵本を作成する。その絵本をインドネシアの日本語学科の学生が、貧困の子どもたちに読み聞かせを行う。その後、生徒とインドネシアの学生が読み聞かせの様子について映像を交えて交流する。このことを通して、生徒がインドネシアについて興味をもち、インドネシアの子どもたちに自分ができることがないかと考えるようになったり、世界中の人々が協力して未来をもっと素敵な世界にしたいと願ったりするようになった。

インドネシア語の絵本を作成するため

に、生徒が地域から絵本を集めたり古本屋で購入したりした絵本に、インドネシア語訳を切り貼りする。それをインドネシアの学生に送る。インドネシアの学生40人が貧困地域を訪れ、読み聞かせを行う。インドネシアの貧困状態にある子どもや孤児院の子どもにとって、絵本の読み聞かせは初めての体験となり、日本の絵本に接することで世界を広げることにつながる。

絵本という肩肘を張らないものを介して活動することで、日本の生徒、インド

ネシアの学生と貧困にある子どもたちをつなぎ、SDGsの解決など未来を見つめる活動となっている。



貧困の子どもたちに読み聞かせを行うインドネシア青年

審査委員
より

絵本プログラムとして、日本の中学生、インドネシアの大学生、アジアの貧困状態にある子どもや孤児院の子どもとの三者をつなぐことを目的に活動している。特に、インドネシア語の絵本にするために、生徒が翻訳を切り貼り作業することは、文化の特徴や生活の様子に対する理解を深める。また、こうして作成した絵本を使って、現地のインドネシアの学生が読み聞かせをしている映像を、日本の中学生が見ながら、感じたり考えたりしたことを伝え合うことで、双方向の交流を生み出していることが評価された。



探究発表会

福井県 ^{かなづ} あわら市金津中学校

「あわら考幸学」の推進

(日本文化・ふるさと共創教育領域)

第2次あわら市総合振興計画「暮らしやすく幸せを実感できる街」の実現のため、2022年からスタートした探究学習プログラム。将来的に地域の担い手となる中学生の主体性を育み、地域とのつながりを深めるために、「あわら考幸学」として総合的な学習の時間に組み込まれている。金津中学校1年生には、市内の経済スポットを訪れ、観光や福祉・環境を考える授業を計画している。2年生にはあわら市のPR活動を修学旅行の目的地や東京都内の商店街で行い、活性化について考える授業を行っている。3年生は、インタビューなどの調査で得た情報を基に、自ら考えを論文にまとめる

いる。生徒自らが探究学習のテーマを設定し、課題を見つけて調べていく姿勢が育ち、分かったことを発表したり議論したりする過程で、論理的に考え自分のことばで伝える力が育成されている。また、地域の方々と積極的な交流を進めることで、住民も元気をもらい世代間交流も促進されている。未来を担う中学生が「自分ごと」としてより良く生きることのできる幸せな社会を築くような具体的な取り組みが、しっかりと公立中学校の教育課程に根づいて

いる。「幸せ」は生徒も、保護者も、地域も皆が願う探究課題の大きなテーマとなっており、共に追究できるものとなっている。



あわら市議会で政策を提案

審査委員
より

2022年からスタートしてまだそれほど時間的経過はないが、年間カリキュラムがよく練られており、大学のラウンドテーブルでの成果発表も経験している。幸せとは何かを大テーマとして「あわら考幸学」と題した教育プログラムである。課題づくりや発表の場を修学旅行に設定するなど、他の行事とともに上手に関連させている。3年生の論文はデータに基づいた理論構築をしており、きちんと仕上げられている。思春期の時代の微妙な生徒の心情に寄り添った課題づくりを丁寧に進めて、さらに笑顔の見える活動に発展させてほしいと願っている。



<漫才>を笑顔で音読するコンビの様子

新潟県 樋口 大輔 (新潟市立浜浦小学校 教諭)

子どもの笑顔があふれる教室 ～〈漫才〉を音読する国語の実践を通して～

(国語教育領域)

樋口大輔氏の「子どもの笑顔があふれる教室 ～〈漫才〉を音読する国語の実践を通して～」は、子どもたちの表現力とコミュニケーション能力の育成を目的として、朝学習の15分間を使って継続的に行われている実践である。

この実践で最も特徴的なのは、これまで国語教科書等で扱われてこなかった漫才に着目している点である。樋口氏が用意した漫才の台本をクラスの二人がコンビを組んで一緒に音読するという、小学校国語科学習指導要領の音読の指導事項に該当する言語活動であるが、漫才という笑いを前提とした台本の音読であることから、台本の内容から生じる面白さ

だけでなく、読み間違いも楽しむ雰囲気や醸成され、子どもたちが間違えることに萎縮せず、意欲的に活動することにつながっている。また、意欲的に取り組む姿勢は、聞き手であるクラスの友達に合わせて台本の内容を変更したり、子どもたちが発案企画し、児童会祭りで漫才や音読劇を発表したりなど、主体的な学びの実現をもたらしている。

コンビを固定せずに毎回相手を代えることで、多くの友達と笑いや楽しさを共有し、共に学び合う温かい学級の雰囲気がつくられている。また、児童会祭

りでの発表は児童会の自主的な活動へと発展し、笑顔のあふれる温かい雰囲気が学校全体へと広がりを見せている。



<漫才>を楽しそうに音読するコンビの様子

審査委員
より

漫才に着目することで、音読に関する実践にとどまらず、子どもたちが間違いに萎縮せず互いに認め合い学び合う、温かい学級の雰囲気づくりに寄与する実践となっている点が評価できる。その成果は、失敗を恐れず挑戦する気持ちや自己肯定感に関する調査結果が、全国平均と大きく差を広げて高いことにも表れている。音読に関しても、聞き手を想定して内容を吟味しながらノンバーバルも含めて工夫するなど、子どもたちの学びにつながっている。さまざまなことばの学びにつながる可能性のある実践を、さらに深めて進めることを期待したい。



消灯前の遊び



学校運営協議会での熟議の様子

静岡県 裾野市東地区おやじの会

毎月開催の「何にもしない合宿」をベースとした日常の関係づくり

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

この団体は、母親が中心になりがちなPTA活動のなかで、父親も積極的に関わることを促す目的で設立された。当初は、マス釣りや餅つきなどの体験活動を子どもに提供する活動をしていたが、そのうち「体験は提供できても、本当に教育につながっているか」という疑問に直面したという。そこで、子どもが育まれる教育に必要なのは、子どもと地域の大人が知り合い、名前を呼び合える関係性をつくることではないかと気づき、過度な負担感を感じずに継続できるお泊り会を毎月実施することにした。興味深いのは、発想の転換によって、大人はあえて何もプログラムを準備しないことにし

て、「何にもしない合宿」と名づけて、毎月一回子どもたちが学校に集まって自由に過ごせる場を提供するお泊り会を継続していることだ。夕食と入浴を済ませた子どもたちが18時半以降に集合し、21時の消灯まで体育館などで自由に過ごし、翌朝も遊んだあと7時半に解散して、朝食は各家庭で取るという合宿である。

子どもたちが自分の過ごしたいように過ごせる場が継続された結果、子どもと大人との信頼関係が育ち、

子どもからは「〇〇をやってみたい」と声が上がって実施に至ったり、準備や片づけも子どもたちが行うようになっていく。



集合写真

審査委員より

「何にもしない」活動を継続するという点が斬新で、独創性がある。年に一回のキャンプよりも、毎月のお泊り会によって、互いに顔の見える関係、名を呼び合える信頼関係を長期的に醸成することの方が重要という理念は、非常に大切である。異学年の子ども同士のタテの関係、子どもと地域の大人が名前を呼び合える関係、地域の大人同士の関係が深まり、地域のコミュニティが形成されることは、意義深い。活動を伝える写真には、子どもたちの自然な笑顔がたくさん輝き、子どもが自分の過ごしたいように過ごしている場の雰囲気が伝わってくる。

愛知県 北名古屋市立師勝北小学校 学校運営協議会

地域と共にある学校づくり～互恵的な諸活動を通して～

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

多くの学校運営協議会は、校長の学校経営方針を協議し承認することを主たる仕事としているが、この団体はそれにとどまらない。学校運営協議会として、学校の教育活動を支援する活動を実施し、さらには地域の子どもの育てるための学校を拠点とした独自の教育活動を主催しており、その活動を13年にわたり継続していることに独創性がある。

具体的な学校支援の活動としては、読み聞かせ、図書館整備、学習支援、防災マップづくり、高学年児童による独居老人宅訪問、ふれあいボランティアまつりなどが、地域学校協働活動として実施されている。また、理科や総合的な学習の

時間など、具体的な授業の実施についても、メダカの授業や田んぼや畑の学習支援ボランティアとして関係団体や地域住民が多く関わっている。

また団体主催の独自の活動としては、子どもの意見から誕生した「夜の学校で学ぼう」活動(レクリエーション活動および避難所体験)、餅つき会などが実施されている。

この学校運営協議会の活動では、校長や教職員はあくまでも協力者としての位置づけにとどまっており、企画を協議会が

主導し、多くの関係団体や地域住民が参画することで、学校の教職員の働き方改革にも一役買っている。



餅つきの様子

審査委員より

校長の学校運営を承認するだけでなく、学校の教育活動を支援したり、レクリエーション活動など独自のイベントを主催する学校運営協議会である点に、独創性がある。また、13年の経験を経て、子ども自身がアイデアを出すようになったり、学校に関わる各種団体の連携拠点として機能し地域の団体が活性化したりするなど、学校を中心とする地域コミュニティが醸成されていることが伝わってくる。子どもと学校と地域を能動的につなぐ役割を果たす点で、これからの学校運営協議会のモデルの一つになるのではないかな。



幼小の教職員が同じ研究組織で研究を進める



沖縄県の山内中学校とオンライン交流会を実施

京都府 京都市立下京雅小学校

幼小一体型の研究組織の構築 YM0プロジェクト ～ Yobai-Miyabi-Organization ～

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

幼小9年間を見通した育てたい資質・能力を「探究・ふれあい・誇り」と位置づけ、教職員が一丸となって、子どもの心が動くような具体的な方策を検討し実践している。1年生の生活科「生き物となかよし」では、身近な生き物を育てるなかで、子ども一人ひとりの思いや願いの実現に向かう学習環境を設定し、子どもの好奇心や探究心の高まりに応じた環境・活動・働きかけによって心を動かすことを大切にしたい。3年生の総合的な学習の時間「わたしたちのまちじまん」では、町の自慢に対して問いをもち解決策を考え探究的に学んだ。そのなかで、子ども一人ひとりが自ら探究のスパイラル

を繰り返す、自分との関わりで地域を見つめていくことになった。5年生の総合的な学習の時間「わくわくみやびWORK」では、校区の商店街や幼稚園において職場体験を実施した。そのなかで、働くことの意義や価値を感じたり考えたりして、地域や社会のために役に立ちたいと一層願う姿があった。

これらの実践により、子どもは探究的な学びを通して、身近な人々、社会および自然に繰り返し創造的に関わり、自らの問いを見い

だし解決していくことに自信と誇りを持ち、より一層さまざまな人・もの・ことと触れ合うことの良さを実感している。



生き物のすみかを友達と話し合ってつくる

審査委員
より

全教職員や地域・保護者の共通理解のもと、「探究・ふれあい・誇り」が高まる教育活動を行っている。生活科では、環境構成の工夫によって子どもが思いや願いを実現できるようにしていたり、総合的な学習の時間においては、単元の本質に関わる場面で対話を活性化し、子ども一人ひとりの興味・関心に応じて子どもに任せる時間を保障したりしている。こうした子どもの主体性と教師の指導性が発揮されるバランスを取っていることが、具現化された実践であると評価された。

京都府 木津川市立泉川中学校

つなぐ平和の学び ～友情は国境を越えて 姉妹校との半世紀ぶりの交流再開～

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

総合的な学習の時間に地域学習と平和学習の二本柱として、沖縄市立山内中学校との51年ぶりの姉妹校交流を再開した。これは、本校の玄関にある「友情は国境を越えて」という石碑を起点にして、この地域と沖縄とのつながりを「平和の尊さ」「友情の価値」という教育資源として捉えた。50年以上前に山内中学校と交流していた地域住民を探し、当時の様子や沖縄への想いを聞き取ったり、その方の当時の文通相手や関係者と会ったりして、記録や写真、文集などの資料から交流の歴史を再構成した。また、こうして収集した情報を掲示物や新聞でまとめ、地域の祭りで発信することで、かつ

て交流のあった地域住民を探す活動となった。このように、生徒の活動は、自分自身のなかだけでとどまらず、地域社会とも連携・協働して、世代を超えた「学びの連鎖」が生まれている。

この活動の拠点として「地域コミュニティルーム・Peace加茂」を設置し、山内中学校との交流や地域に関する歴史資料を蓄積・展示する場としている。地

域住民の学びの場・憩いの場となり、生徒にとっては「自分の地域を再発見する場」となっている。



半世紀前に交流をしていた山内中学校卒業生らが来校

審査委員
より

51年前まで交流があった沖縄の学校との交流を再開したり、交流に関わる地域住民を地域の祭りで巻き込み、関わる人々を増やしたりした。こうした取り組みを生徒が主体性を発揮して、探究的な学びを連続・発展させている。それとともに、生徒の探究を支えるために、「地域コミュニティルーム・Peace加茂」を設置したり、教員間の連携を図ったりしていることで、持続可能な取り組みとなっている。これらの点が評価された。



高まりピラミッドがすべてに活用できると語る3・4年生

岡山県 井原市立県主小学校

ふるさとの未来を願い、 児童の思いを実現する探究学習

(日本文化・ふるさと共創教育領域)

6年前、本校児童の課題は、自分の思いを友達や地域住民にことばで伝えることだった。国語科の研究を重ねながら生活科・総合的な学習の時間に移行しつつ、3つのプロジェクトチームが、学校教育目標の達成を目指して教育課程を編成し、課題解決に尽力。特に、そのうちの1つのチーム「きずなリーフ」が軸となり「ふるさとの未来を願い、児童の思いを実現する探究学習」（あがた未来学）を展開している。具体的な活動として、探究学習を児童の思いからスタートさせており、児童がなりたいた自分を意識して学習や生活を行うことができるように導いている。また、児童が自分の思いをもっ

て学んだことを地域住民等に伝える機会を多く設定し、大人からの賞賛を受けて自信をもって生活し、より一層主体的な姿に成長する環境づくりを進めた。フェスタはその取り組みの一つで、2年生は、育てた野菜の収穫パーティーまでの栽培記録を動画にして広く紹介した（生活科）。3・4年生は、地域の魅力を探究し広くフェスタで紹介するとともに「高まりピラミッド」に学びの過程をまとめた（総合的な学習の時間）。5・6年生は、「県主未来プロジェクト」を立ち上げ、7回にわたる地域住民との意見交換を重ねた

後、地域の団体や中学生、地元企業や幼稚園と協働し3つの取り組みを実現し、このプロジェクトを成功させた（総合的な学習の時間）。なお、これらの教育活動が展開された背景には、優れた組織マネジメントが教育を支えている。



未来会議で取り組みについて地域住民と話し合う5・6年生



通級指導教室での勉強の様子

奈良県 安里 健志（大和高田市立浮孔西小学校 教諭）

通級指導担当教員が実施する 児童の障がい理解を深める教育活動

(特別支援教育領域)

通級指導を利用する児童の中には、周囲の児童に対して強い不安を感じていることがある。周囲の児童も通級による指導とは何か、なぜ利用しているのか説明もないため、自分とは異なる特別な存在と受け止めてしまうことがある。安里健志氏は、それらの課題に大きく二つの方向から実践を進めてきた。一つは、通級指導において、自分の特性と向き合いながら自分なりの方法で課題解決を図ることのできる力を育成する専門性の高い指導である。もう一つが、自作絵本の活用をはじめとした通常の学級での発達障がいの理解啓発学習である。「学級のみんなに自分のことや自分が学習しているこ

とを知ってほしい、もっとみんなと仲良くなりたい」という通級利用児の願いをきっかけに、「教室で学んでいること、学んでみて良かったこと、自分の苦手なことと得意なこと、なぜ教室を利用しているのか、みんなに分かってほしいこと」を自分のことばで紹介する。また、学級全体で「自分研究」を行い、それぞれの児童が自分に内在する「自分キャラクター」を言語化して交流を行う。それらの取り組みが、通級利用児の自信や級友との関わりを向上させるとともに、



自分研究をする児童の様子

審査委員
より

通級指導の対象となる児童生徒が急増するなか、全国で取り組みたい優れた実践である。毎日の学習や生活のなかで困難を経験している発達障がい児が自分と向き合うことは容易ではない。しかし、専門性の高い指導のなかで自分への気づきを高めるとともに、自分にとって通級指導教室で学ぶことの意味づけが行われている。通級指導を利用する児童の願いをもとに、波及効果の高い発達障がいの理解啓発学習を教育課程に位置づけて実施していることも評価できる。小学校低学年や中学校での実践を積み上げ、系統的な障がい理解教育プログラムの開発を期待したい。

審査委員
より

総合的な学習の取り組み一つひとつが児童の願いや思いからスタートしている。この基盤になるものは、日々の授業への取り組みである。学習においてギミックブラッシュアップシートを開発・更新して児童主体に変えたことで、「そんなのは無理」ということばが学校全体から消え、周りの人の声を聞き主体的に対応できている。ここまでは保護者や地域が協力から協働へ変化したことに加えて、組織のマネジメントでも斬新な工夫がある。職員のリーダー会はずくに教育課題を取り入れ、若手を育成したりできる持続可能で先駆的なマネジメントである。



第13回研究会(2025年)

広島県 広島県肢体不自由特別支援学校自立活動研究会
(福山特別支援学校、広島特別支援学校、西条特別支援学校)

3校の協働で積み上げる肢体不自由のある 子どもの主体的な学びに向けた実践

(特別支援教育領域)

広島県の3校の肢体不自由特別支援学校は、2013年から校内分掌に自立活動部を設けるとともに、3校が合同した「自立活動研究会」を立ち上げた。そして、自立活動研究会を中心に3校の自立活動部が連携して、教員の専門性向上と指導力の伝播に関する取り組みを10年以上にわたって積み上げてきた。自立活動研究会は、自立活動の指導の「流れ図」に指導の状況と成果、今後の展望を加えたA4版で両面一枚からなる「自立活動実践報告シート」を開発し、それらを各校の実践で活用するとともに、3校の事例を同じ様式を用いて実践報告会で共有している。実践知の共有や蓄積には、一人

ひとりの実態をどのように捉え、なぜその指導目標を設定することにしたのか、設定に至る考え方を指導担当者間で共有していくことが重要となる。自立活動実践報告シートを共通のツールとした実践は教員の振り返りと気づきを促し、肢体不自由児の大きな変化をもたらしている。自立活動実践報告会で共有された事例は「自立活動実践事例集」としてデータベース化され、3校共通の教育資源として活用している。それらは、肢体不自由教育の経験の浅い教員の大きな手掛

かりとなるだけでなく、県外からも多くアクセスされ全国の肢体不自由教育の専門性向上に寄与している。



第1回研究会(2013年)

審査委員
より

肢体不自由教育は、肢体不自由と知的障がい、感覚障がい、医療的ケア等の重複化が進み、一人ひとりの多様な実態に対して専門性の高い指導が求められている。これまで培われてきた指導の知識や技術をいかに継承していくかも大きな課題となっている。広島県肢体不自由特別支援学校自立活動研究会の取り組みは、それらの課題に対して大きな示唆を与える実践である。持続可能な取り組みとなるために、校内で組織的に取り組む体制づくりや、研究会を輪番で担当するなどの工夫も評価できる。肢体不自由教育を担う学校や学級で参考にしたい実践である。



当時の鉄道の利用者や運転手からのゲストティーチ

岡山県 和気町立佐伯小学校

「ひと・こと・もの」とつながる 佐伯小夢プロジェクト

(日本文化・ふるさと共創教育領域)

2017年に佐伯小学校と統合した旧山田小学校の校舎を保存するために、地域と学校が一体となり再活用に向けた取り組みを実施している。具体的には、再活用の見込みがなければ取り壊しの可能性が高いと知った閉校時の在校生を含む6年生が清掃活動を行い、毎年この思いを継いだ6年生が、地域の方と共に地域活性化に向けて取り組みを行う「ふるさと共同活動」が続いている。この活動をきっかけに、探究的な学習サイクルを通して、地域の社会問題を解決しようと主体的な力を養い、地域への愛着を深めることを目的とした地域学習が進められている。また、地域学習の深化に向けて、学期に2回

程度教職員による座談会を設定している。年度初めには、総合的な学習の時間の全体計画や活動例を基に、児童と共に教職員が学習計画を立てている。また、活動の目標をできる限り数値化することで、児童がその取り組みの達成状況を把握して、粘り強く課題に向き合うことができるようにしている。高学年では「片鉄の魅力調査隊」(2024年度)として、廃線となった片上鉄道や廃線後に整備されたサイクリングロードに関わる調査を行い、サイクリストに向けて資料館やカフェを開

いた。2021年度から始まった地域をフィールドにした活動は、児童の「〇〇したい」という願いを活かし、教科横断的な学びへと変化したことで、教科の各単元の目的意識が明確になり、授業を深く学ぶ児童の姿が増えてきた。



実際に自転車に乗り地域を肌で感じるフィールドワーク

審査委員
より

統廃合された旧小学校の清掃活動からスタートした児童の活動に、上手に総合的な学習の時間を組み合わせ、地域住民との交流も積極的に進めている。低学年から地域活性化の課題意識を育てていく取り組みの裏側には、綿密な指導者の検討が拝察される。学びへの児童の意欲を継続させるために、数値目標を定めて役立たせている点は、初等教育において新しい試みだと考える。児童は中学校へ進学して、地域への視野が広がる。小学校区で学んだことを核にした学びが広がる可能性を感じる。小中連携を深め地域の未来を創る人づくりにつなげてほしい。



保護者や地域の方を招いてのポスターセッション

宮崎県 さいと つま みなみ
西都市立妻南小学校

ふるさと西都を未来につなげよう ～SDGs プロジェクト in 妻南小～

(独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動領域)

ふるさとを大切にしながら、国際的な視野をもって行動できる子どもを育てるにはどうしたらよいか。地域の課題を自分ごととして捉え、自ら問い、調べ、発信し行動できるようになることを目指す学習活動「さいと学」を教育課程の柱に据えた実践である。

具体的には、まずSDGsについて学び、地域の文化や産業の課題を調べたうえで、子どもたちがそれぞれ探究テーマを設定して調査し、「マイアクション」を実施して、地域へと成果を発表する年間実施計画になっている。

活動を始めた当初は、子どもたちから「どうしてこの学習をするの?」と言

う声も聞かれていた。しかし、教師たちが、単元の導入時に問いを設定し、子どもが課題を自分ごととして感じられるような仕掛けを準備するなど、丁寧に支援することを通じて、子どもたちは次第に「社会の一員として自分にもできることがある」と考えられるように成長していった。廃校問題を考えるプロジェクトなど、子どもにとって身近で切実なテーマに迫る探究活動が行われている。中には、体育着等のリサイクルをする「おさがりシステムの開発」や、「ストロー

削減運動」など、次年度や他校に引き継がれる活動が出てきて、子どもの学習が具体的な波及効果を生んでいる。



「卒業生のランドセル回収」プロジェクト

審査委員
より

SDGsに関する学習活動は、ごみ拾いなど、面白くないその場限りの表面的な活動になりやすい。しかし妻南小学校では、子どもが「自分ごと」と思える問いをもてるように、導入の段階で丁寧な支援が行われ、それによってリアルな情報収集、粘り強い探究や情報発信活動へと発展してきた。探究に値する「問い」を自分で立てることはあらゆる学習の土台であり、子どもの問いを起点にする教育課程の理念は秀逸である。発表シートには子どもたち自身が苦悩し、探究し、解決活動を探っていく道筋がよく表現されている。

公益財団法人 博報堂教育財団

公益財団法人博報堂教育財団は、児童に対する国語教育と視覚・聴覚障がい者に対する教育を助成し、あわせてその活動に関する調査研究を行うことで、健全な人間形成に寄与することを目的に、1970年に設立されました。以降、「子ども」「ことば」「教育」を活動領域ととらえ、さまざまな活動を行っています。

財団設立時から続く優れた教育実践活動を顕彰する「博報賞」をはじめ「児童教育実践についての研究助成」「教職育成奨学金」「日本語教育プログラム」「社会啓発事業」さらに「調査研究事業」などの活動を行っています。

【編集・発行】

公益財団法人 博報堂教育財団

〒100-0011

東京都千代田区内幸町2丁目2-3

日比谷国際ビル14階

TEL.03-6206-6266 (平日9:30～17:30)

FAX.03-6206-6582

URL: <https://www.hakuhodofoundation.or.jp>

博報賞問合せメール: hakuhoushou@hakuhodo.co.jp

Award Recipients' Activities